

タイトル	石井良平伝
著者	石井, 耕; ISHII, Kou
引用	北海学園大学学園論集(188): 1-47
発行日	2022-07-25

石井良平伝

石 井 耕

第一章 昌平坂学問所時代

1 はじめに

本稿は、石井良平（擇所）を取り上げ、その生涯に関わる資料を探索し、可能な限りではあるが、評伝として著す。石井良平は筆者の五代前の先祖である。四章構成であり、第一章は、昌平坂学問所時代である。以下、第二章 御書物同心時代、第三章 川越藩侍讀時代、第四章 その後の石井家、と続く。

2 石井良平（擇所）の略歴

『国書人名辞典』（岩波書店、1993年）によれば、石井良平は次のような簡単な略歴で紹介されている。

「武蔵川越藩儒。天保13（1842）年歿。墓、江戸麻布正光院。名文衷、字子哲・子若、石泉堂、通称良平、号擇所。尾藤二洲（朱子学者、寛政の三博士）に漢学を学び、藩校「博諭堂」の創設に尽力した。著作「五経訓式定本」「小学摘解編」「小学本註摘解補」。」

藩校は、正式には川越藩のときは講学所と言ひ、博諭堂と呼んでいなかった。これは幕末前橋に移った後の校名である。良平の川越藩時代については後述する。

このように、これまで一般の資料では、石井良平は川越藩儒であったという紹介しかされていない。それ以前の、御書物同心すなわち幕府御家人であったこと、あるいは幕府の学問吟味で乙科及第であったことは、一般の資料においては、一度も紹介されていない。ただし、断片的には、多くの情報が残されている。今回、その情報を掘り起こしてみた。

麻布正光院に墓が現存する。その墓碑は、「擇所石井先生之墓 門人杉村輪謹書」（杉村輪は、杉村輪之助であり、同じ川越藩儒者である。杉村については後述）となっている。（写真）

正光院は、1630年（寛永7年）開創で、瑠璃山、古義真言宗、高野山正智院末である。現在の元麻布3丁目2番20号にあり、明治時代は、桜田町35（明治2年から）、江戸時代は、麻布正光院門前である。

最近、新しい資料と出会えた。東京の墓所を探索しつづけた磯ヶ谷紫江が発行していた『墓碑



写真1 擇所石井先生之墓 (麻布・正光院)

史跡研究』の33号(1926年)に、「石井擇所之墓」が掲載されていたのである。

「麻布区桜田町35番地(市電、材木町下車南へ二丁)瑠璃山正光院の墓地南寄崖下に、石井擇所の墓がある。擇所、名は文表字は子哲良平と称し、尾藤二洲に学び、前橋藩に仕う。

六基並列している第二基目が擇所の墓で、臺石一重、高二尺九寸七分、幅一尺一寸、厚七寸九分、正面に、

擇所石井先生之墓

門人杉村輪漠書(杉村輪謹書と思われる)

その右側の一基、正面に、

擇所先生之配川崎氏墓

観照院如鏡妙圓大姉墓

その左側の第一基目の正面に、

石井君鯉山翁太郎左衛門之墓

その二基目の正面に、

照松孺人中山氏墓

眞澄孺人難波氏墓

その三基目の正面に、

石井誠平之墓

その四基目の正面に、

石井祐次郎

全 鑑三郎 墓

紅露女子

と刻し少し手前の方に離れ、東面して勿論新しい石で『石井家累代之墓』の一墓が建てられてある。」

右側一基目は、良平（擇所）の妻の川崎氏の墓と思われる。左側一基目は、父太郎左衛門の墓である。二基目の中山氏は、母の墓と思われる。しかし、「難波氏」は不明である。三基目は弟誠平の墓である。しかし、四基目の三人は全くわからない。並び方からすれば、誠平の子どもかもしれない。なお、幕末に川越藩は前橋藩に復歸しているのので、前橋藩藩儒という言い方がされるが、石井良平は川越藩時代の藩儒である。

1778年（安永7年）に、おそらく石井良平（擇所）は生まれている。『新編埼玉県史 資料編12 近世3文化』（1982年3月）に掲載されている「擇所府君墓誌」から推定される。「擇所府君墓誌」は、「嘉永四年（1851年）冬十一月、不肖子孝愛謹誌（孝愛は、良平の四男欽四郎、後述）、門人保岡正填諱」で終わっている。そして、「右保岡正太郎先生文章、正太郎、号川莊、嶺南子（門人正填、正太郎は川越藩儒者の保岡嶺南（元吉）の子である。保岡家については後述）、山内貞吉謹写、無窮会図書館蔵」という注が付けられている。「擇所府君墓誌」によれば、石井良平は「1842年（天保13年）正月11日歿、年65」となっている。歿年は明確である。生年はここから逆算して、1778年（安永7年）生まれと推定される。

「擇所府君墓誌」によれば、平氏の出で、備中に住み、石井氏を称する。一方、「昌平学科名録」によれば、父は幕臣石井太郎左衛門で、文化3年当時、御持弓頭堀三左衛門組与力である。御目見以下の抱席の御家人である。石井太郎左衛門がいつから堀三左衛門組与力となったのか、はたまたいつから幕臣となったのか、は定かではない。

「石井家家譜」では、石井太郎左衛門の父、良平の祖父は石井茂兵衛範吉であり、安永9年7月27日に歿している。良平が生まれてまもなくである。備前あるいは備中に居住していたようだが、武士であるとしても、何をしていたかはわからない。「家譜」には、それ以前の記録が遡って書かれているが、ここでは探求しない。

石井太郎左衛門範伸、幼名平馬（大助）は「江戸ニ出デ、徳川幕府ニ仕ヘ」た。この「江戸ニ出デ」の一句に従い、太郎左衛門が幕臣となった最初の人物と考える。幕臣になることは容易くないが、不可能でもなかったのである。御家人株の売買も行われていた。幕末の勝海舟、榎本武揚も川路聖謨・井上清直兄弟も、もとは幕臣の家系ではない。先代などが御家人となり、そこから昇進して、活躍したのである。

石井太郎左衛門は1821年（文政4年）10月29日に歿し、正光院に葬られている。その妻、良平の母は、備前仕官中山總右衛門の娘、1827年（文政10年）10月19日に歿している。正光院に葬られている。良平の両親については、正光院の墓碑と一致するのである。両親とも、良平が幕臣から転じ、川越藩に仕官した後に亡くなっている。

3 昌平坂学問所

(1) 学問所と学問吟味

昌平坂学問所と学問吟味については、橋本(1993)などの先行研究に基づいて、石井(2009)で論じたので、ここでは、簡単な経緯だけ触れておきたい。

1790年(寛政2年) 寛政異学の禁 松平定信の寛政の改革の時期。

1791年(寛政3年) 尾藤二洲、儒者として招聘。

1792年(寛政4年) 昌平校を造営、講義を開始。

1793年(寛政5年) 林述齋、林家を継ぎ、大学頭となる。

1794年(寛政6年) 第二回学問吟味(実質的な開始)。

1797年(寛政9年) 昌平坂学問所を官学校とする。第三回学問吟味。

1800年(寛政12年) 第四回学問吟味。

1803年(享和3年) 第五回学問吟味。

1806年(文化3年) 第六回学問吟味。以降1818年(文政元年)まで中断。

(2) 尾藤二洲

「擇所府君墓誌」によれば、良平は服部栗斎、尾藤二洲に学んでいる。『日本史必携』(吉川弘文館編集部編、元は関儀一郎・関義直編「近世漢学者伝記著作大事典」)によれば、石井良平は、尾藤二洲の門下14名のうちの1名に挙げられている。後に同じく川越藩儒となる長野豊山(友太郎)も同門である。

服部栗斎は、1736年(元文元年)摂津西成郡生まれで、1800年(寛政12年)65歳で歿している。上総飯野藩儒であったが、致仕し、寛政初年、松平定信から江戸麹町に土地を与えられ、麴溪書院を設けて多くの門弟を教えた。(『国書人名辞典』による)

尾藤二洲は、寛政三博士の一人であり、昌平坂学問所の儒者である。1747年(延享4年)(幕府届出は延享2年生)伊予川の江に生まれる。1813年(文化10年)12月14日67歳で歿している。回船業を営む家に生まれたが、幼時船上で傷を負い、生涯脚が不自由となり、学問の道に進む。頼春水・中井竹山等と交流し、大阪で開塾し、教育・著述に従事した。「正学指掌」などの著述で知られ、朱子学を正学とする論調の中心的人物の一人であった。1791年(寛政3年)幕府に登用され、昌平坂学問所の儒者として、禄二百俵を得た。通称良助(良佐)、名は孝肇、字は志尹である。尾藤二洲は、1811年(文化8年)12月致仕した。(『国書人名辞典』、『日本近世人名辞典』)

ここから、石井良平は、はじめに麴溪書院で服部栗斎に学び、その後昌平坂学問所で尾藤二洲に学んだと思われる。

前述の尾藤二洲の門下14名について、『国書人名辞典』によって詳細を見てみよう。掲載されている門下生のうち、二洲の三男尾藤水竹(通称高蔵、後に浦賀奉行支配組頭、林奉行)を別にすれば、幕臣は石井良平だけである。岡鼎(伊予宇和島藩士、藩校教授)、上甲拙園(同宇和島藩

士）、石井豊洲（安芸竹原生まれ、頼春水に学ぶ、三原藩儒臣）、近藤篤山（伊予小松藩儒、藩校教授）、越智高洲（近藤篤山と大阪の尾藤二洲の塾を守る）は、伊予・大阪時代の門下とみられる。

加藤梅崖（通称俊治、丸亀藩士、昌平校舎長、のち江戸藩邸藩校教授）、長野豊山（通称友太郎、二洲と同郷の伊予川之江生まれ、文化2年昌平校、のちに伊勢神戸藩藩儒、川越藩藩儒など、後述）、河野杏庵（仙台藩医）、さらには関儀一郎・関義直編「近世漢学者伝記著作大事典」に掲載されている門下の中清泉（あるいは勝村豹、通称主膳、丸亀藩儒、昌平校舎長）、大塚毅斎（通称桂、白河藩士、藩校教授）などは、二洲の昌平坂学問所時代の門下生と見られる。加藤・長野・中・大塚は、天明3-4年（1783-4年）生まれの同世代であり、いずれも幕臣ではない。「昌平坂学問所は、林家塾を改組して1797年（寛政9年）に設立されて以来は幕臣の教育機関となり、他家の家臣たる諸藩士や浪人・庶民は直接の教育対象とされなくなった。また、幕臣と非幕臣とが同席する勉強会を持つことは学舎内では禁じられた。——儒者の門人で非幕臣の者たちが学問所構内の儒者役宅（官舎）に住み込んで修行を続けていた。その彼らを「書生」というのである。また、学舎の近くにある儒者・尾藤二洲の役宅の一部は「書生寮」と称されて、多くの書生が寄宿していた。その後、この「書生寮」を公費で拡充する請願が実り、役宅を改造・建て増して1803年（享和3年）ごろに本格的な非幕臣用の学寮が完成した（『日本教育史資料』第七巻、191-2頁）」（橋本（1993））。加藤・長野・中・大塚の4名およびほぼ10歳年下の河野は、この書生であったとみられる。ただ、書生寮の名簿は、この時期のものは残っていない。

(3) 石井良平の学んだ時期の昌平坂学問所

「昌平学科名録」によれば、1806年（文化3年）石井良平は、第六回学問吟味において乙科及第している。推定では28歳と考えられる。肩書きは「御持弓頭堀三左衛門組与力太郎左衛門忰」である。この時及第となったのは、甲科 6名 うち御目見以上3名、御目見以下3名、乙科 25名 うち以上14名、以下11名、丙科 33名である（後述）。石井良平は、乙科及第以下11名のうちの1名である。なお、第七回は、幕府財政緊縮の影響で中断され、12年後の文政元年に行われている。

石井良平が、どのように昌平坂学問所で学んだのかはわからない。寄宿稽古、通い稽古、あるいは尾藤二洲の書生いずれの可能性もある。この時期の「昌平坂学問所日記」で残存しているのは、1800年（寛政12年）「日記」（閏4月16日-6月16日）、「日記」（6月17日-12月）、1801年（享和元年）「日記」（正月-9月6日）であり、次は1809年（文化6年）である。石井良平は、この寛政12年、享和元年の二年間の日記には登場しない。

この時期の昌平坂学問所の儒者は、大学頭林述齋のもとに、尾藤二洲（前述）、古賀精里（儒者期間 寛政8年5月28日-文化14年5月6日病死）、山上定保（藤一郎、第二回寛政6年甲科及第、儒者見習期間 寛政7年5月8日-文化4年12月22日、代官に転出）の3名である。奥儒

者となった柴野栗山、儒者から代官となった岡田寒泉も時々講師を務めている。また、幕臣の兼務である学問所出役があり、教育の様々な業務を担っていた。

4 昌平坂学問所の重要人物

(1) 林述齋

1768年(明和5年)–1841年(天保12年)、諱は衡(たいら)、字は徳詮・公鑑、通称は大学頭、大内記、号は述齋・蕉軒。美濃国岩村藩主松平家の第三子で、1793年(寛政5年)幕府の命により林家を継ぎ、大学頭となる。1838年(天保9年)11月に次男・榿宇に大学頭をゆずり、自身は大内記を名乗る。昌平坂学問所を官学校とし、学問吟味を実施した中心人物である。(『日本近世人名辞典』)当時の文部大臣であり、幕府外交顧問であり、学長であった。

「学問所日記」には祭酒として登場し、重要な意思決定に関わっている。

さらに、主に林述齋の管轄のもとで、この時期の幕府は多くの編纂事業を行っている。「近世後半、特に寛政期以降の時代は、あたかも「編纂書の時代」と呼んでも過言ではない程に大きな編纂物が著された時代である。」(高橋(1989))述齋は、『寛政重修諸家譜』などの編纂に関与し、特に、『佚存叢書』は注目されている。

「『佚存叢書』110巻60冊は、中国では既に散逸しつつも日本において現存する漢籍16種を収めた叢書であり、6回に渡って刊行された。すなわち寛政11年『古文孝經孔伝』以下6種に始まり、第6回の『景文宋公集』の刊行に終わる叢書であった。」「—『佚存叢書』は、述齋の寛政11年から文化7年に渡る11年の漢籍の輯佚書探索という考証学の実践の成果であり、「編纂書の時代」の諸書の編纂は、その方法を和書に応用したものと意義付けられるのである。」(高橋(1989))

「林述齋は、直面する課題に対処するため歴史の活用を重視していた。その歴史編纂に対する姿勢は、十八世紀中国の清朝考証学の影響を受けた考証学派がさかんになったのを背景に、きわめて実証を重んじるものだった。」(藤田(2003))

編纂の中心となる組織は昌平坂学問所であり、地誌調所、沿革調所などの組織が構成された。さらに、右筆、紅葉山文庫、天文方、和学講談所などとの連携作業も多く見られる。これらの編纂物の一部には、編纂に携わった者の氏名が明記されており、その中に学問吟味及第の旗本・御家人の名を数多く見出すことができる。(福井(1983))

また、外交についても関与している。藤田(2005)に「江戸幕府対外政策と林述齋」の論考がある。「林述齋は、たんに儒学者として幕府の教学に関わっただけではなく、幕府の内外政策の諮問をしばしばうけて深く関与した。」(287頁)「林述齋は、幕府の重要な対外政策の議論のほほすべてについて諮問をうけていたらしい。」(305頁)

(2) 古賀精里

弥助、樸(すなお)。1750年(寛延3年)生–1817年(文化14年)歿。

佐賀藩士の家に生まれ、京都に遊学した。福井小車・西依成斎に学んでから朱子学を主とし、尾藤二洲・頼春水と親交があった。帰国後、藩校制度の整備に努め、その教授となった。1796年（寛政8年）招聘されて、幕府昌平坂学問所儒者となった（禄200俵）。文化8年林述斎に従って、対馬に赴き、朝鮮通信使と折衝した。多くの著書がある。三男は、同じく儒者となった古賀小太郎（侗庵）である。（『日本近世人名辞典』366頁）

（3）古賀侗庵

石井良平が昌平坂学問所にいた頃は、まだ儒者ではなかったが、後に学問所で重要な役割を果たすようになる古賀侗庵（小太郎）についても、ここで紹介しておきたい。

1788年（天明8年）佐賀に生れる。父に従い、江戸に来る。1809年（文化6年）儒者見習い（禄200俵）となり、1817年（文化14年）儒者となる。1847年（弘化4年）1月に享年60歳で歿する。「海防臆測」「読書矩」など多数の著述がある。子息が幕末の儒者で蛮書調所の開設者古賀謹一郎（謹堂）である。

（4）山上定保

藤一郎、桐原。儒者見習。第二回学問吟味1794年（寛政6年）甲科及第（23歳）、寛政6年5月22日小十人組番入り。儒者見習期間 1795年（寛政7年）5月8日－1807年（文化4年）12月22日、代官に転出。林家の「升堂記」を見ると、山上藤一郎は、寛政元年林信敬の時代に、御徒目付熊太郎の子として、安原三吾の「口入」で「升堂（入門）」している。

山上家は、抱席の御家人であったが、父熊太郎博泉の時代に旗本に昇進している。熊太郎は寛政4年御徒目付から小普請方へ昇進し、寛政6年12月27日小普請方から代官となった。家禄は70俵5人扶持である。

『続徳川実紀』によれば、山上藤一郎は寛政9年10月儒者見習勤務のうちは、禄200俵となる。『寛政譜以降旗本家百科事典』によれば、文化4年代官からその後御役御免、小普請入り。

1824年（文政7年）6月8日歿、1771年（明和8年）生であれば、53歳（「東京掃苔録」）。

（5）学問所勤番組頭

学問所事務長ともいうべき勤番組頭には御家人からの登用がある。『続徳川実紀』寛政12年3月に、黒沢正助、鈴木岩次郎（天明8年天守番）が「新置」の学問所勤番組頭（御目見）を命じられている。

黒沢正助は、儒者雉岡の子であり、父と同じく田安家に仕え、その後勤番組頭となった。1758年（宝暦8年）生－1824年（文政7年）歿である。

鈴木岩次郎は、後の書物奉行（文化9年）であり、白藤として詩作などに活躍した人物である。また、鈴木白藤は、古賀侗庵の岳父でもある。

「1767年(明和4年)9月16日生, 1851年(嘉永4年)12月6日歿, 85歳。名成恭, 字士敬, 号白藤, 通称岩次郎。文政4年書物奉行免職。小普請入り。和漢の歴史に詳しく, 古書を多く蔵した。大田南畝・山崎美成・小林歌城らと親しかった。著書多数。」(『国書人名辞典』) 書物奉行時代と免職については後述する。森潤三郎『紅葉山文庫と書物奉行』に評伝がある。

「学問所日記」寛政12年には, つい立や小机の調達などについて, 鈴木岩次郎が関わっていることが記されている。昌平坂学問所の立ち上げを, 事務方のトップとして担ったのである。

享和元年4月14日, 「黒沢正助今日御役替, 林奉行被仰付候」(学問所日記)。6月8日林源一郎が後任となった。

武鑑によれば, 文化13年においては, 学問所勤番組頭は, 中神順次, 猪飼鶴三郎の2名である。中神順次は, 寛政6年乙科及第, 文化3年御徒目付から, 学問所勤番組頭となった。猪飼鶴三郎は, 富士見宝蔵番から, 文化9年12月7日学問所勤番組頭になった。(『日本教育史資料 第七卷』) おそらく鈴木岩次郎の書物奉行就任の後任であろう。

5 「卒業生」たち

昌平坂学問所で学び, 学問吟味に及第した者たちは, 幕府の重要な職務に就いていく。幕末に近づくにつれ, その比重は高まり, 例えば1858年(安政5年)外国奉行が新設された際には, 5名のうち4名が学問吟味の及第者であった。御家人の及第者についても, 遣米使節となった森田岡太郎(天保9年甲科及第), 遣欧使節となった田辺太一(弘化5年甲科及第), 儒者となり維新後は「西国立志編」を訳した中村釧太郎(正直, 嘉永6年乙科及第)など多数が挙げられる。

昌平坂学問所の創設期の1794年(寛政6年)の第二回学問吟味から1806年(文化3年)の第六回学問吟味までの及第者からも, その後の幕府の中核を担う人物が多数登用されていく。

ただし, この時期の及第者とくに当主は, まだ昌平坂学問所で学んでいたわけではない。学問吟味には有能な者を選抜する意味が大きかった。例えば, 第二回の及第者は, 遠山景晋(43歳), 奈佐久左衛門(50歳), 松平内蔵助(42歳), 人見又兵衛(40歳), 滝川小右衛門(年齢不明だが, 現役代官)などであった。御家人大田直次郎(南畝)も46歳である。第四-五回頃から学問所で学んだ及第者が多くなってくる。

旗本(御目見以上)から主要な及第者の一部を紹介すれば次の通りである。特に, 遠山景晋と筒井政憲は, その後の幕府の政策決定過程, 特に海防を巡る政策において, 重要な役割を果たす。

第二回

遠山金四郎景晋 下記

山上藤一郎定保 儒者見習い, 代官, 前記

宮崎平四郎成美 宮崎太一郎成身の父, 文人として著名

第三回

勝安兵衛 佐渡奉行

増島金之丞 儒者

青木郷助 右筆

第四回

野村兵藏 儒者

夏目長右衛門 松前奉行

第五回

筒井右馬之助政憲 下記

大草大次郎公弼 地誌調所，文人としても著名

小出伊之助 代官

依田恵三郎（源太左衛門） 儒者，奥儒者

第六回

筑紫主水 学問所御用，浦賀奉行

川勝頼母 御書物奉行

遠山金四郎景晋 1752年（宝暦2年）生れ。目付として、松前、長崎に赴任、その後長崎奉行（1812年（文化9年）-1816年（文化13年））、勘定奉行（1819年（文政2年）-1829年（文政12年））。1837年（天保8年）歿す、享年86歳。実子は、遠山金四郎景元。1793年（寛政5年）生れ。勘定奉行（1838年（天保9年）-1840年（天保11年））を経て、天保改革時の町奉行（1840年（天保11年）-1843年（天保14年））。烏居耀藏と対立し、大目付に転ずる。その後町奉行に復帰（1845年（弘化2年）-1852年（嘉永5年））。1855年（安政2年）歿す、享年63歳。いわゆる「遠山の金さん」。

筒井右馬之助政憲 1778年（安永7年）生れ。1810年（文化7年）二ノ丸留守居兼学問所御用、1815年（文化12年）目付、1817年（文化14年）長崎奉行（-1821年（文政4年））、1821年（文政4年）町奉行（-1841年（天保12年））、天保改革時には冷遇されたが、弘化2年学問所御用、弘化4年西ノ丸留守居となり、阿部正弘の信任を受け、海防政策に深く関与。1853年（嘉永6年）プチャーチン応接のロシア使節応接掛などを歴任した。1859年（安政6年）歿す、享年82歳。

遠山景晋、筒井政憲の両名は、目付から長崎奉行に就任し、勘定奉行か町奉行を長く務めている。この間に、海防に関わる様々な実務や提言に関わっている。

次世代となる文政年間の主要な旗本及第者は、次の通りである。文政元年、乙科鈴木八三郎（設楽八三郎、後に代官、御勘定吟味役海防掛）、文政6年甲科井戸鉄太郎（後浦賀奉行、大目付）、乙科松崎満太郎（後儒者）、飯室清次郎（稲葉正申、後長崎奉行）、文政11年乙科杉原平吉（後儒者）、戸田卓太郎（氏栄、後浦賀奉行）などである。

表1 学問吟味及第者数の推移

		甲		乙		計		丙
		以上	以下	以上	以下	以上	以下	
寛政6年	1794	4	1	5	9	9	10	28
寛政9年	1797	2	0	17	4	19	4	12
寛政12年	1800	2	0	18	7	20	7	21
享和3年	1803	5	2	13	9	18	11	26
文化3年	1806	3	3	14	11	17	14	33
文政元年	1818	2	1	8	3	10	4	28
文政6年	1823	3	2	9	5	12	7	18
文政11年	1828	4	0	10	1	14	1	20
天保4年	1833	1	1	4	2	5	3	10
天保9年	1838	2	2	7	2	9	4	17
天保14年	1843	3	2	13	12	16	14	36
弘化5年	1848	2	2	15	7	17	9	30
嘉永6年	1853	1	2	24	11	25	13	37
安政3年	1856	1	3	33	15	34	18	55
安政6年	1859	2	2	29	15	31	17	40
文久2年	1862	1	2	32	17	33	19	42
元治2年	1865	2	1	18	16	20	17	20

注：寛政6年が第二回である。

6 「同級生」たち

「同級生」とは、同じ試験で学問吟味に及第となったことを示している。昌平坂学問所で同時に学んでいたとは限らない。また、年齢も同じではない。

御家人（以下）たちが、学問に励んだことと、その後の経歴の関連については、石井（2009）で分析した。旗本には及ばないにせよ、多くの御家人が、学問吟味に及第となっている。

それでは、御家人の昌平坂学問所での受講、学問吟味受験のモチベーションは、どのように高められたのであろうか。『日本教育史資料 第七巻』の中に、御家人の昇進について、次のような記述がある。やや時代は下るが、天保14年5月9日、学問所（筒井政憲および儒者）から、御家人池田活平（天保14年甲科及第、小普請方手代出役）について、

「学問御試の節甲科乙科の御褒美罷成候ものは部屋住御番入御調の節右の廉合を以御番入被仰付候先例に御座候活平儀は御目見以下の儀には候得共甲科御褒美被下置候者に御座候間右を以て此度御入人の内え被差加候様仕度奉存候殊に「軽輩」の者には候得共心懸宜敷学業無懈怠出精仕追々教授取立も仕候」「学問御引立の廉に相成り別て「軽輩」の者共迄相励可申儀奉存候依之猶又此段申上候以上」

と述べている。「軽輩」（カッコは筆者）を取り立てることを願ひ出ているのである。学問吟味及第から昇進への道筋が、「軽輩の励み」であったのである。（橋本（1993）も参照）

あちこちで引用されているが、『旧事諮問録—江戸幕府役人の証言—』の中で、学問所勤番組頭であった石丸三亭に、「昌平坂学問所の事 追補学問所規則覚書」を聞いている（明治24年11月7日）。その中で、重野安繹（帝国大学文科大学教授）が「出世に関係する。あそこを及第すると履歴になりますからな」「つまり仕官のためにあそこへ這入るのですから」とコメントしている。重野は、薩摩藩から書生寮に入っていたのである。

宮崎成身『視聴草』によって、石井良平と同じ文化3年学問吟味及第者を分類すると、次のようになる。甲科以上3名、乙科以上14名、甲科以下3名、乙科以下11名、計31名である。植木八三郎（玉厓、狂詩作者として著名）より後の者のうち、大嶋九郎太郎を除く14名が、御家人である。この時期の御家人の及第者は、様々な現場に派遣されている。ここでは触れないが、勘定所での登用も多い。例えば、大田直次郎は、御徒から支配勘定に昇進し、大阪・長崎に赴任している。

(a) 御右筆部屋縁類（以上）

時服二 1名 甲科、戸田十五郎（御小姓組番頭出羽守惣領）
巻物三 7名 乙科、筑紫主水（寄合、後に学問所御用）、当主川勝頼母（大御番、後に御書物奉行）・鈴木直之丞（小普請組）・三賀清五郎（西丸御書院番）・羽太弥太郎（西丸御書院番）・江原馬之助（大御番）・田中安之丞（御勘定）

(b) 躑躅の間

時服二 1名 甲科、以上、人見弥右衛門（小普請組世話取扱、後に表右筆）
銀十五枚 1名 甲科、以上、太田友三郎（大御番頭八十八養子、及第後番入り）
巻物三 1名 乙科、以上、大河内彦四郎（小普請組）
銀十枚 6名 うち5名は、乙科、以上、養子あるいは惣領 山本権十郎・安藤左京・山岡宇之助・大原富之丞（代官大蔵養子、後代官）・渋江久太郎（いずれも及第後番入り）
うち1名は、甲科、以下、植木八三郎（大御番与力彦右衛門養子）

(c) 焼火の間 6名（乙科、以下、譜代席と推定、褒賞は非記載、『続徳川実紀』では、銀七枚）

当主与力 中里三次（御先手）・片山重次郎（大御番）・眞里谷政五郎（御先手）
小普請 福井久七郎（『続徳川実紀』には記載がない）
悴 小林鉄之助（御先手与力勝蔵悴）・柴田有七郎（紅葉山火之番見習）

(d) 躑躅の間

褒賞不明、乙科、以上、大嶋九郎太郎（箱館奉行支配調役榮次郎惣領、召し出されて勘定とせら

る(『続徳川実紀』), 後勘定組頭, 二ノ丸留守居)

御褒詞 20名(丙科, 以上と見られる)

御褒詞 10名(丙科, 以下と見られる)

(「昌平学科名録」では, 丙科33名になっており, 3名少ない)

(e) 御支配へ御書付渡し(以下, 清助以外は抱席と推定, 『続徳川実紀』には記載がない)

銀十枚 1名 甲科 日根野文三郎(清水奥向勤方織之丞弟)

銀七枚 2名 甲科 浦野懐之助(西丸御裏御門番同心)

乙科 木村行蔵(御普請役)

銀五枚 4名 乙科 石井良平・清助(御賄六尺, 二半場)・神谷幸蔵(御勘定吟味方下役浩吉悴)・
蓮見就蔵(御普請役見習藤太夫悴)

石井良平は, 最も格の低いクラスで, 城内にも呼ばれず, 上役に「御書付」が渡されたわけだが, 褒賞は銀五枚であった。親の太郎左衛門からの幕臣であり, おそらく幕臣歴は最も短い。

7 昌平坂学問所の重要事業

(1) 人事情報

『藩翰譜続編』は, 大名の系譜, 家伝を取めたもので, 寛政元年から文化3年にわたって作成された。はじめは, 儒者岡田寒泉(後代官に転出), 右筆瀬名貞雄(寛政8年に退任)が担当した。以降は右筆所が担当し, 奥右筆近藤吉左衛門, 御徒中神順次(寛政6年乙科及第, 以下), 飯田直次郎(寛政6年乙科及第, 以下), 奥右筆屋代太郎などが参加した。井上作左衛門(寛政6年乙科及第, 以下)も清書に参加した。

『寛政重修諸家譜』は, 寛政元年に着手され, 若年寄堀田正敦を総裁に, 堀田正毅を副総裁の態勢で, 寛政11年から文化12年にわたって作成された, 旗本の家譜をまとめたものである。林述齋が統括している。担当したのは, 山本忠兵衛(寛政9年乙科及第, 以上), 高林弥蔵(寛政6年乙科及第, 以上), 夏目長右衛門(寛政12年乙科及第, 以上), 屋代太郎, 大草大次郎公弼(享和3年乙科及第, 以上), 松平喜太郎(寛政12年甲科及第, 以上), 中神悌三郎(寛政9年乙科及第, 以下), 勝田彌十郎(享和3年乙科及第, 以下, 後御書物奉行)などであった。

この両者は, 幕府の基本的人事情報の収集であり, 昌平坂学問所設立以前にスタートしている。

(2) 地誌調所

文化4年のロシアのエトロフ侵掠後, 「鉄砲鍛錬の者」として, 箱館に派遣された上記文化3年乙科及第・以下の与力中里三次(隆達)から, 昌平坂学問所の同輩にあてた文化4年8月10日付けの手紙が, 平田篤胤「千島の白浪」に収録されている。

あて名は、「増島金之丞様（蘭園、寛政9年乙科及第、以上、後儒者）、小嶋孫左衛門様、間宮庄五郎様（士信、寛政12年乙科及第、以上）、大草大次郎様（公弼、上記）、三嶋政蔵様、浦野懐之助様（元周、文化3年甲科及第、以下）」となっている。また、文中に、「大河内（彦四郎か）、横山、鈴木（直之丞か）、吉田、松崎（善右衛門か）」にも見せてもらいたいとしており、これらは「同級生」らしい。大河内彦四郎と鈴木直之丞は小普請組で、文化3年乙科及第者である（松崎は下記）。「出立前ハ各様御出被成下、殊ニ御餞別被下、不浅忝次第奉存候。」「昌平之事おもひ出し申候。恋々之至不堪涙痕候。」と記されている。昌平坂学問所で学んだ仲間たちへの心情が伺える。「同級生」の石井良平も、同様だったのだろうか。

このあて名の人たちは、おおむね文化7年に林述齋によって学問所に設置された、地誌調所の面々である。中心人物が、間宮庄五郎（士信）である。文化7年から文政3年にかけて、「編脩地誌備用典籍解題」が編まれた。地誌編集事業を行ったときに、参考にした地誌、地図類の解題書目である。参加した編集者は、出役頭取間宮士信を中核に、村井量令、戸田氏徳、中里仲舒らであった。

「新編武蔵風土記稿」は、間宮士信を主任に、文化7年に着手し、文政11年に完成している。編集の実務に参加した者は次の通りである。間宮士信、松崎善右衛門純庸（享和3年乙科及第、以上、後の儒者松崎満太郎の父）、三島六郎政行、猪飼次郎太郎久栄、亀里権左衛門章、中神順次守節（寛政6年乙科及第、以下）、戸田卓十郎氏徳、勝田彌十郎猷、村井専之助量令などであった。「新編相模国風土記稿」は、文政7年から史料を探索し、天保元年に起稿、天保12年に完成した。編集者の多くは「武蔵」と同様である。また、三島政行は「御府内備考」の編纂主任である。

なお、先述の手紙の差出人中里三次は、地誌調所の中心人物のひとり中里新十郎（仲舒）ではないか、と推測される。

中里三次以外にも、北方の現地には、学問吟味及第の御家人が派遣されている。ロシアとの関係が厳しさを増す中で、それまで松前藩に任せていた蝦夷地の統治を、幕府で直轄することになっていった。1799年（寛政11年）東蝦夷地を直轄領とし、1802年（享和2年）蝦夷奉行（のちに箱館奉行）を置いた。さらには、1807年（文化4年）西蝦夷地も直轄領とし、箱館奉行を廃し、松前奉行を置いた。この直轄は、1821年（文政4年）まで続き、そこでいったん松前氏に還付された。この間を、前幕領期という。なお、箱館開港によって、再び直轄領となった時期を、後幕領期という。前幕領期に、伊能忠敬の蝦夷地測量（寛政12年）、間宮林蔵の間宮海峡の発見（文化5年）が行われたのである。直轄領となった蝦夷地に、多くの人材が派遣されていったのである。（直前の寛政10年、近藤重蔵は「大日本恵土呂布」の標柱を建てる。）

児玉嘉内（寛政9年乙科及第 小普請組伊藤河内守支配）は、享和4（文化元）年2月蝦夷地在住、文化4年4月箱館奉行支配調役下役（「休明光記」など）。しかし、文化4年、ロシアの樺

太・エトロフ侵掠時にエトロフ島に駐在しており、後に、対応を咎められ、「おもき追放」処分を受ける。

また、柳権十郎(寛政12年乙科及第 勤方世話役手伝)は、文化14年松前奉行所調役下役元メ。

さらに、早川八郎(享和3年乙科及第 明屋敷番伊賀之者)は、文化4年箱館奉行支配下役(「休明光記」)。

(3) 沿革調所

文政9年に完成した「番外雑書解題」の編集は、戸田氏徳が中心となり、宮崎成身(文政元年乙科及第, 以上)、間宮士信、村井量令などが参加した。宮崎太郎成身は、学問所内の沿革調所に勤務していた。

林大学頭は、沿革調所において、「記録解題」を、間宮士信らに命じて編集させた。文政7年に着手し、文政11年に完成した。関与したのは、間宮士信、戸田氏徳、中里伸舒、村井量令、大草大次郎公明らである。

「朝野旧聞哀藁」は、徳川氏創業史であり、文政2年に着手し、天保13年に完成している。編集者の中心は、間宮士信、戸田氏栄(文政11年乙科及第, 以上、後浦賀奉行)、宮崎成身である。他に大草大次郎公明、村井量令、乙骨彦四郎(鳥羽彦四郎、文政6年乙科及第, 以下)なども参加している。

やや時代は下るが、「通航一覧」は、幕府の外交の参考にするために編纂された。沿革調所で、宮崎成身を中心にまとめられた。嘉永3年から嘉永6年に行われ、続編は安政3年に完成している。

(4) 御実紀編纂

山本(1979)は、「徳川実紀」の編纂過程について、林述齋の「御実紀」という備忘録の写本に基づいて、詳しく論証している。寛政11年編纂の建議が提出され、文化6年成島司直が正式に編纂を命ぜられ、その邸および右筆所において、編纂が行われた。天保14年完成し、献上されたが、この時点で、昌平坂学問所を実紀調所が移されたと推測されている。

さて、この備忘録に、文化6・7年頃、実紀編纂にあたった出役が登場している。その中に、萩野八百吉(奥右筆組頭手附、松平縫殿助組西丸御徒、「昌平学科名録」では、萩野、享和3年甲科及第・以下)、小林鉄之助(御先手依田平左衛門組与力勝蔵子、仮御抱与力、石井良平と同じ文化3年乙科及第・以下)の二名がいる。この両者は、学問吟味及第者である。

(5) 官版の発行について—教科書

「朱子学を公定化し、学校において武士層にその学習を求めた異学の禁体制は、儒学学習の定型

化を進めることになった。— 加えて幕府の学問所で校訂された公定テキスト（いわば教科書）が「官版」（幕府による出版を「官版」という）として多く出版され、全国の漢学の標準とみなされた。この官版刊行は、昌平校が幕府の直轄学問所となった寛政末年から本格化し、1867年幕府滅亡の年まで継続した。その総計は200部にのぼる。こうして定型化した儒学が広く普及していく。それは武士や一部民衆層の間に一定の共通した「教養」が定まっていくことを意味している。」（藤田（2003）の中の辻本稿196–200頁）

福井（1985）によれば、官版の総数は、197部、214版に及ぶ。

（6）昌平坂学問所と学問吟味の幕政における重要性

「軽輩」を昇進させていくということは、その能力を幕府の施策に活用していくということである。学問吟味及第者に、現場での仕事を与えていくのである。その現場とは、急を告げてきた海防がまず挙げられる。上記地誌調所の項で示す通り、ロシアとの緊張が高まるなか、蝦夷地に派遣されていたものは多い。蝦夷地以外にも、長崎、浦賀など海防に関わる現場に派遣されていく。

また、幕府の海防に関わる施策の判断基準を定めていくための基礎的な準備として、今でいう「データベース」の作成にも力点を置いていく。昌平坂学問所内に、地誌調所、沿革調所を設け、これまでの海防に関わる様々な史料を収集し、編纂していく。かなり広範囲に亘り、まさに「編纂書の時代」を形成したのである。ここにも、学問吟味を及第した多くの幕臣の能力が活用されていった。そして、それは、昌平坂学問所だけでなく、「御実紀」における右筆、「重訂御書籍目録」における紅葉山文庫などとの連携をとって行われていったのである。これも現場である。先例、他国の例、詳細な地誌、人事情報など、政策判断の基礎となる情報を包括的に収集していったのである。明確な定義ではないが、「幕府官僚制」の基礎を構築していったのである。上司である老中、若年寄といった大名も、こうした「データベース」に依存せざるをえない。

重要なことを再度確認しておく、第一に海防などの幕府の施策を検討するにあたって、その基礎を成す蝦夷地、長崎、浦賀などの現場、及び地誌調所、沿革調所などの情報収集の現場が重視され、そこに多くの人材が投入されていったことである。第二にその人材は、昌平坂学問所で教育され、学問吟味に及第した旗本御家人から登用されていったということである。彼等には共通の「知識基盤」が形成されていた。そして、それらを統括していたのは、大学頭林述齋であり、それを補助していた学問所御用の筒井政憲や儒者たちであった。また、遠山景晋のような指揮官としての町奉行、勘定奉行、長崎奉行、浦賀奉行、松前奉行などであった。石井良平も、こうした「幕府官僚制」の最末端に組み込まれていた可能性が高い。詳しくは、第二章、第三章で述べる。

8 「家譜」について

石井良平は、筆者の五代前の先祖である。ただし、筆者の家に残されているのは、後に書き写された「石井家家譜」のみである。しかも、他の資料と照合していくと、誤りも多い。また、おそらく意図して、拡大解釈したと思われることも多い。誇張が多かったと言われる由緒書の記述を引き継いでいるのかもしれない。従って、「石井家家譜」に基づく記述は、部分的なことにとどめている。

第二章 御書物同心時代

1 屋鋪授受

1813年(文化10年)11月8日「御書物同心 石井良平 四谷内藤裏番衆町72坪余授受(小菅清吉土地)」の屋鋪授受の記事がある(『東京市史稿 市街篇 第三十四』477頁)。すなわち、石井良平は、このときは、幕臣・御家人であったことがわかる。御書物同心とは、江戸城内にある将軍の書庫、紅葉山文庫の管理がその職務であった。いわば、当時の日本最大最高の図書館の司書である。なお、屋鋪の与えられた四谷内藤裏番衆町は、現在の新宿5・6丁目あたりである。

2 御家人

石井良平は御書物同心という役職の御家人であった。

幕府には、旗本 5200人(うち番方34%, 役方25%, 小普請支配34%), 御家人 1万7000-8000人がいたと言われている。旗本は御目見以上、御家人は御目見以下である。御家人にも、譜代席、二半場(譜代准席)、抱席(抱入)という家格があった。御書物同心は、この御家人抱席である。譜代席と二半場は、家督の継承が認められているが、抱席は家督の継承は認められていなかった。原則は一代抱なのである。逝去した場合や隠居した場合には、「番代」が選ばれる。ほとんどは子弟だが、非血縁者が選ばれる場合もある。そこから、御家人抱席において、御家人株の売買や養子縁組が行われ、幕臣以外の武士、商人、農民などが御家人になる可能性が出てくるのである。

御書物同心の役高は、30俵2人扶持より15俵1人半扶持までであった。ちなみに、父太郎左衛門の御持弓組与力の役高は、現米80石より150俵までであった。(小川『徳川幕府の昇進制度』、戸森『江戸幕府の御家人』)

御家人の家計は苦しく、多くが傘張・植木・金魚昆虫飼育などの副業・内職に精を出していたといわれている。石井家も副業に励んでいたのだろうか。

3 紅葉山文庫

(1) 概要

それでは、石井良平の勤めていた紅葉山文庫とはどのような組織だったのだろうか。長澤孝三『幕府のふみくら—内閣文庫のはなし—』によれば、次の通りである。「家康は、慶長7年6月、江戸城本丸の南辺、富士見の亭に文庫を建て、金沢文庫本その他の蔵書を取めた。これが、紅葉山文庫の始まりである。」「幕末には土蔵が四棟となり、1866年（慶應2年）まで存続した。」「文庫の蔵書総数は、1819年（文政2年）に七万五千冊であった。」「文庫を管理する者として書物奉行（正式には御書物奉行）が置かれた。」「三名ないし七名が任命され、若年寄に直属した。」「御書物同心は、最多であった文政5年には、定員外を含め24名が附属し、毎日交代で出勤した。」「職員の日常業務は、出納・曝書（虫干し）・修補などの管理業務である。」

石井良平は、内藤新宿から江戸城まで通い、文庫のさまざまな管理業務を行っていたのである。

紅葉山文庫の書籍は、漢籍、御家部、国書部、付存部に大別されていた。御家部とは、徳川氏の事績、江戸幕府の記録類や編纂物などである。付存部とは、戯曲・通俗小説、蛮書（洋書）、朝鮮の著述、満州文の図書などである。65%程度が漢籍で、15%程度が国書であり、その多くは史書であった。15%程度が御家部であった。

(2) 御書物方日記

御書物方日記は、国立公文書館に所蔵されており、マイクロフィルムで見ることができる。長澤によれば、「1706年（宝永3年）から1857年（安政4年）までの御書物方の執務日記である「御書物方日記」が現存している。」最初は、「御書物方留帳」というのだが、大部分（209冊）は、享保4年から安政4年までの「御書物方日記」である。1年分が2冊となっているが、19年分の欠本がある。前半部分（1706年（宝永3年）－1745年（延享2年））は、東大史料編纂所によって、『大日本近世史料 幕府書物方日記』として翻刻公刊されている。さらに、氏家幹人によって、「書物方年代記」『北の丸（国立公文書館報）』（42号から）が連載されてきた。その第五回は、文化11年から安政4年にかけてである。ただし、この期間のうちで欠本となっているのは、1827年（文政10年）正月－6月、1828年（文政11年）－1830年（文政13年・天保元年）、1831年（天保2年）7月－1841年（天保12年）6月、1842年（天保13年）7月－1843年（天保14年）6月、1844年（天保15年、弘化元年）－1846年（弘化3年）などである。文政10年以降の欠本が多い。

4 石井良平御書物同心になる

(1) 石井良平の仕事と家族

1810年（文化7年）10月30日、神尾組同心石井良平として、「御書物方日記」に記載される。32歳である。1806年（文化3年）に学問吟味に乙種及第した石井良平は、神尾組同心となっていたようだ。

そして、11月2日、御書物同心見習となる。11月8日「見習」が外れ、11月22日御書物同心の肩書が付く。

1811年(文化8年)3月14日男子が生まれ、豊太郎と名付けられた。1813年(文化10年)9月9日弟誠平が、素読吟味で及第となる。1814年(文化11年)「昌平坂学問所日記」に「7月3日石井良平弟誠平寄宿申込ニ付今日試」の記事がある。昌平坂学問所の寄宿生の試験を受けたのである。30代前半の石井良平は、御書物同心になり、川崎氏の娘と結婚し、第一子が生まれ、弟も順調に学問に励んでいたのである。内藤新宿から江戸城に通って、職務に励んでいたのである。

1814年(文化11年)8月14日・19日石井良平は、積奠御用で、学問所に行く。(これは文化12年8月、文化13年2月・8月、文化14年2月も)積奠とは、孔子を主神に、先師四配(顔子、曾子、子思、孟子)等を祭る行事である。聖堂で祭祀を行う。中国古代を倣って2月と8月に行われた。

照合してみれば、文化11年8月の「昌平坂学問所日記」には、次のように書かれている。「8月14日 源太左衛門(依田)、金之丞(増島)、小太郎(古賀侗庵)(これらは当番儒者、金之丞と小太郎はまだ見習)

一 積奠習礼昼前晴儀二度、昼後雨儀一度、都合三度習礼有之

一 佐渡守殿(筑紫)出席、大学頭殿不快断

「8月19日 弥助(古賀精里)、源太左衛門、金之丞、小太郎

一 積奠晴儀二而有之

一 大学頭殿・佐渡守殿出席、佐渡守殿積奠執役(初献)」

(2) 御書物奉行

当時の御書物奉行は、鈴木岩次郎・近藤重蔵・高橋作左衛門(天文方兼務)などである。

この3名は、いずれも文政年間に、大きな事件の当事者となる。石井良平が御書物同心であった時期は、1810年(文化7年)から、川越藩儒者となった1818年(文化15年)の期間である。この期間の上司にあたる御書物奉行は、次の8名である。

野田彦之進は、寛政6年から、文化10年まで御書物奉行に任ぜられた。名は成勝、1754年(宝暦4年)生まれ、1822年(文政5年)、69歳で歿した。

長崎四郎左衛門(のち半七郎)は、寛政9年から文化10年まで御書物奉行に任ぜられた。

増島藤之助は、寛政7年から亡くなる文化9年まで御書物奉行に任ぜられた。後の儒者増島金之丞蘭園(上記)の父である。

近藤重蔵は、文化5年から、文政2年まで御書物奉行に任ぜられた。名を守重、号を正斎と称した。御家人の出身で、寛政2年家督を継いで御先手与力となり、その後長崎勤務、蝦夷地踏査を行い、開拓・辺防の方策を建言した。その功によって、御書物奉行に榮転し、旗本となった。この間、書誌学的研究を深め、紅葉山文庫蔵書の性質や来歴を明らかにし、また、貴重書の管理

や蔵書目録の改編に多くの改善を加えた。その後大阪弓矢奉行に転じ、差し控えを命じられ、子富蔵の殺傷事件に連座して、お預けになったまま、文政12年、59歳で歿した。（福井（1980A））

増島の後任として、鈴木岩次郎は、文化9年から、文政4年まで御書物奉行に任ぜられた（鈴木岩次郎については、一章および三章でも述べる）。1767年（明和4年）生まれで、名は成恭、号は白藤と称した。学問所勤番組頭から、御書物奉行に任ぜられた。和漢の歴史に詳しく、蔵書家として知られた。文政4年免職となった。その理由は、文庫の図書を他人の求めに応じて書写していたことである。1851年（嘉永4年）、85歳で歿した。（福井（1980A））

長崎の後任として、藤井佐左衛門は、文化10年西丸奥右筆から、病で辞す文化12年まで御書物奉行に任ぜられた。

野田の後任として、高橋作左衛門景保は、天文方兼務で、文化11年から文政11年まで御書物奉行に任ぜられた。天文方として、測量・地図・翻訳等に尽力した。文政11年シーボルト事件で捕われ、翌年、45歳で獄死した。

藤井の後任として、夏目勇次郎は、文化12年から文政4年まで御書物奉行に任ぜられた。

1789年（寛政元年）の御書物同心の定員は、16名であり、うち2名は世話役、4名は書役と称していた。その後1819年（文政2年）同心は5名増員された（福井（1980A））。

（3）御書目校正

氏家幹人「書物方年代記 第四回」では、
「1812年（文化9年）正月－6月

3月20日、書物同心たちに「掛り役」（担当）を申し渡す。次の通り。

御書物書入帳目録 木下伊右衛門

認直し等懸り 石井良平

御修復は勿論都て 増田磐蔵（坂田）

書役申渡し候 木本小市 持田金蔵

定式達書其外 杉山庄五郎（杉山家は代々同心、杉は「榊」の字）

手形取扱懸り 持田金蔵（以下略）」

という記事がある。（それぞれの業務の内容はわからない）石井良平は「認直し等懸り」を担当していた。

氏家幹人「書物方年代記 第五回」から、石井良平が取り上げられた記事を抜き出してみる。この時期、紅葉山文庫では、目録の改訂作業が行われており、御書目校正が継続してなされている。「1814年（文化11年）に着手し、1836年（天保7年）に完成した『重訂御書籍目録』は、記載のもっとも完備したもの」（長澤）である。蔵書の65%は漢籍であり、その分類が御書目校正の最も重要な作業であった。

「1814年（文化11年）7月－12月

9月16日、以下の五人に「御書目并御書籍題号等認違之御品校正懸り」(「御書目校正」掛)を申し渡す。

木下伊右衛門 坂田磐蔵 杉山庄五郎 持田金蔵 石井良平

9月25日、「御目録校正」(=「御書目校正」)につき、左のように取り決める。

御目録校正之儀 決定之所は直に朱にて御書入可被成候 御不決之所は申送帳へ御書被成候て 寄合之節評義之上にて御目録へ書入可申事

10月24日、校正の「御用談」(打ち合わせ)のため、近藤重蔵・鈴木岩次郎・高橋作左衛門の奉行三人が、組中世話役の木下伊右衛門と石井良平を連れて林家(林述齋)を訪れる。

12月4日、校正御用を務める組中(=同心)の御手当願を差し出した件につき、周防守(若年寄・京極周防守高備)より布施蔵之丞(右筆組頭)を介して、一ヶ月に一人金一分下される旨仰せ渡される。

1815年(文化12年)正月-6月

正月26日、「御書目校正始」につき寄合。メンバーは次の通り。

詰番 近藤重蔵 加番 高橋作左衛門 鈴木岩次郎 (以下同心) 木下伊右衛門 阪田半蔵(坂田磐蔵) 杉山庄五郎 持田金蔵 石井良平

1815年(文化12年)7月-12月

7月9日、校正(御書目校正)の用紙と筆墨を御納戸より受け取る。(「校正御手当裏印相済御勘定より良平受取申候」)

7月25日、(新任の御書物奉行夏目勇次郎に)「組中引渡」あり。組中(書物同心)の名は次の通り。

江西文蔵 木下伊右衛門 津田哲五郎 持田金蔵 江西清太郎 野崎斧次郎 小田善右衛門 石井良平 杉山善兵衛 小田専吉 鈴木万之介 木本金次郎

11月2日、祭酒(=林大学頭)来訪。御書目校正の相談をする。

1816年(文化13年)7月-12月

閏8月23日、校正御用のため林大学頭が来訪。相談をする。

1817年(文化14年)正月-6月

正月23日、御書目校正につき寄合。

正月29日、御書目校正のため、「新収取調」(新収書目の調査)を本日までに終える。

5月16日、校正のための「増人」(増員)が認められる。

1817年（文化14年）7月－12月

9月8日、大学頭来訪。御書目校正について評議。

1818年（文化15年）正月－6月

3月12日、御書目校正のため、林祭酒（大学頭）が来訪。

3月16日、「御目録」の経・歴史・諸子の部、計5冊を校正（校正担当の）同心5人（木下伊右衛門・坂田磐蔵・梶山精一郎（杉山）・持田金蔵・井上長蔵）の「宅下げ」とする（それぞれ自宅へ持ち帰る）。

4月7日、御書目校正につき大学頭来訪。同役（書物奉行）申し合わせ寄合。」

文化15年3月の時には、「御書目校正」の掛から、石井良平はすでに離れていた可能性がある。この年の10月に致仕し、川越藩に移るのである。この時は、後日「官板書籍解題略」を編纂した杉山精一郎が加えられている。

なお、弟石井誠平に関する記事もある。

「1821年（文政4年）3月7日の「病気断」は、木本金次郎・江面文蔵・同清太郎・石井誠平・海賀善四郎・津田藤五郎。風邪（インフルエンザ）で病欠している同心が多いことがわかる。」

さて、御書目校正のため、多くの人物が関わっていたことが重要である。林祭酒（大学頭）は、林述齋である。当時の文部大臣であり、幕府外交顧問であり、学長である。屋敷に奉行や同心を呼んだり、紅葉山文庫を来訪したりして、たびたび御書目校正の進行状況について、「評議」すなわち報告を受け、指示を出している。福井『紅葉山文庫』によれば、それまでも書目分類など目録作成においては「新収書を分類することは書物奉行の任務であるが、彼らの能力をこえるものがあつた。その場合には林大学頭の指示を仰いだ。」「第九回の目録作成は「重訂御書籍目録」の編集である。前回（享和の第八回）同様、林述齋が編集を指導した。」ということである。

御書物奉行としては、この段階では、近藤重蔵、鈴木岩次郎、高橋作左衛門が関わっている。「重訂御書籍目録」の作成は、1814年（文化11年）から1836年（天保7年）まで約23年間かかっている。その間の御書物奉行は多数いる。一方、林述齋は1841年（天保12年）に歿しているので一貫して指導的立場にあつた。

実務を担う御書物同心の校正掛としては、この時には組中世話役の木下伊右衛門や石井良平などである。特に、文化11年10月24日の記事で、三奉行とともに、木下伊右衛門と石井良平が、林述齋の屋敷に呼ばれたのは重要であると考えられる。

5 江戸の文人たち

文化文政・天保期の幕府の旗本御家人を見ると、彼らの多くが文人たちと幅広い交友関係を結んでいる。石井良平も、文人との交友関係があつた。

例えば、森銑三（1989）にある「岡本況齋の交友簿」に、22歳から30歳の間の「交友簿」とし

て

「年廿二（文政元年）至三十（文政九年）尾藤氏（高蔵）、杉原氏（平助心齋）、武田氏（道庵）、高橋氏（勇太）、内山氏（清蔵端庵）、宮崎氏（平四郎）、清水濱臣先生、光房（清水八十八）、夏陰（前田健助）、谷島氏（鳳三武正）、山本美保女、松本氏（斗機蔵）、狩谷椽齋先生、大久保氏（鷲峯長之助）、古賀氏（侗庵）、梶氏（莊岳忠）、赤井氏（源蔵）、武井氏、石井氏（量平）、長野氏、鍵半（本石町鍵屋半兵衛、石田醒齋）、東條一堂、義門師、小林氏（歌城）、仲田氏（顯忠）、大田氏（八郎全齋）、凡廿六人」

とある。推測では、「量平」は「良平」ではないか、と考えられる。長野氏は、長野友太郎（豊山）とみられる。清水濱臣、狩谷椽齋は「先生」である。尾藤高蔵（二洲の三男）、杉原平助（儒者）、宮崎平四郎（「視聴草」著者の宮崎太一郎の父）、古賀侗庵（儒者）などと並んで、石井良平も交友関係にあったようだ。文政のこの時期は、すでに川越藩の江戸詰の儒者である。

岡本況齋は、通称縫殿助、名は保孝である。1797年（寛政9年）若林包貞の次男として生まれたが、父は出生前に歿し、1815年（文化12年）19歳で幕臣岡本保修の養子となった。養父もすぐ歿したが、家を再興した。清水濱臣の門人となり、狩谷椽齋に従い、況齋の学問の道は開けた。和・漢・仏典まで広く研究し、著書は数百巻に及んでいる。明治以降、大学中博士となり、1878年（明治11年）歿した。（『日本近世人名辞典』）岡本況齋は、森鷗外の『洪江抽齋』にも登場する。

6 石井家、御書物同心を継ぐ

石井良平は、1818年（文化15年）幕府の御書物同心から、川越藩の藩儒に転じた。良平の川越藩時代については、第三章で詳しく述べる。

御書物同心は、弟の石井誠平が跡を継いだ。兄から弟への順養子は、ごく一般的に行われていた。

1818年（文化15年）10月13日の「御書物方日記」に、「石井良平病氣」という記事がある。そして、10月22日には「代弟誠平」となる。「番代」に弟誠平が選ばれたのである。12月3日「弟誠平御抱入」と採用が決定し、12月4日「見習石井誠平」となる。12月8日に「誓詞」を提出し、12月18日には「見習」がとれる。なお、御抱入の決定は、月番御書物奉行の近藤重蔵宅で行われたが、近藤重蔵は、翌年（文政2年）2月2日には大阪弓矢奉行に転じている。事実上左遷と言われている。

1820年（文政3年）石井誠平が「兄良平儀松平大和守家来」となったことを届け出ている。

しかし、1821年（文政4年）父太郎左衛門が亡くなった頃から、誠平は体調が良くないようである。1822年（文政5年）石井誠平は病気となり、御抱替えとなる。代わりに、石井讓二郎（讓次郎とも書く）が養子となることが認められる。石井讓二郎は石井良平の次男である。長男豊太郎が1811年（文化8年）生れたから、次男の讓二郎はまだ10歳にもなっていなかったと思われる。

る。

1827年（文政10年）11月石井讓二郎は「誓詞」を提出し、12月御書物同心「見習」となる。15歳頃だろうか。1831年（天保2年）正月2日、石井讓二郎の勤務記録があるが、その後は不明である。1840年（天保11年）まで「御書物方日記」自体が欠けている期間となる。

第三章 川越藩侍讀時代

1 川越藩

1749年（寛延2年）前橋藩は、酒井氏から姫路城主越前松平氏（大和守朝矩）へ領知替えとなった。

しかし、1767年（明和4年）松平大和守朝矩は、利根川の前橋城への浸蝕がはなはだしく、前橋から川越へ移転した。前橋も大和守領として継続している。川越藩は、これまでの酒井氏、堀田（正盛）氏、松平（信綱）氏、柳沢（吉保）氏、秋元氏を経て、松平大和守領となったのである。

この時期の重大な出来事として、1783年（天明3年）浅間山大噴火がある。その影響もあり、松平大和守家の表高は十五万石であったが実際には50-60%に低下していたと言われる。度重なる転封による負担も大きく、財政的に困難な状況であった。

重田正夫『川越藩』（シリーズ藩物語、2015年）によれば、大和守朝矩は、川越に移った翌年、1768年（明和5年）6月病歿し、7歳の朝矩の次男直恒が跡を継いだ。さらに、1810年（文化7年）、直恒は歿した。そして直恒の次男直温が跡を継いだが、1816年（文化13年）7月に病歿した。僅か24歳である。いずれも川越の喜多院に葬られている。（写真の廟所）

そして、1816年（文化13年）8月に直恒の三男、直温の弟の矩典（20歳、1797年-1850年）が跡を継いだ。後に、1835年（天保6年）將軍家斉の一字を拝領し、松平齊典となった。藩主として34年間、大和守家の再建に努力した人物である。以下、松平齊典の時代の川越藩について述べていきたい。

『日本近世人名辞典』では、松平齊典は「藩財政の窮乏を打開するために旧領姫路への転封や前橋帰城嘆願を行い、天保11（1840）年出羽庄内への転封（三方領知替え）を命じられたが、庄内領民の反対闘争により翌12年7月12日転封中止となり、代わりに二万石加増され十七万石となった。天保13（1842）年相模御備場警備を命じられ、嘉永2（1849）年のイギリス船マリナー号航行に対しての動員により、12月23日大広間席に上り、嘉永3（1850）年1月20日歿した。54歳。川越喜多院に葬られた。文武両道に精励、和歌を尾高高雅に、国学を沼田順義に学んで「興国公詩歌集」を著し、兵学の研究「巖武備」19巻を撰した。文政10（1827）年7月24日川越に藩学博諭堂（講学所）を創建、江戸赤坂・松山陣屋・前橋にも分ち、尾藤二洲の門人石井擇所（良平）、中井竹山の門弟長野豊山、豊山の門人保岡嶺南、朝岡操などが儒員として活躍した。弘

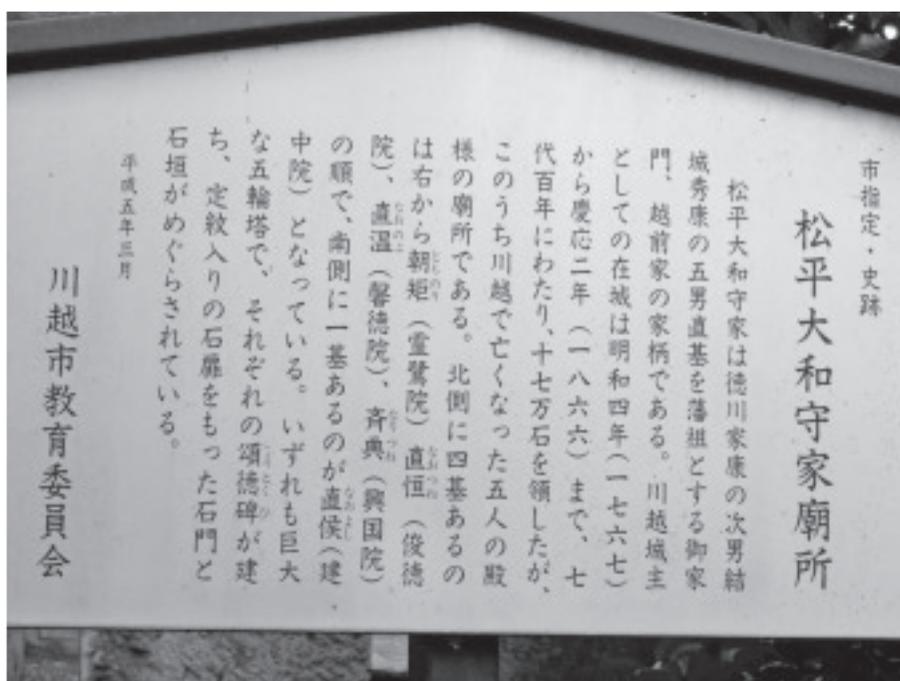


写真2 松平大和守家廟所 (川越市・喜多院)

化元（1844）年8月保岡嶺南に命じて、頼山陽が生前刊行の悲願を果たせなかった「日本外史」22巻、いわゆる川越版外史を上梓した。」（大野瑞男）と紹介されている。

重要なことは、海防のための相模警備、藩財政窮乏の打開のための領知替え願い、藩士の教育、士風の刷新のための藩校設立の三点である。この三点は川越藩だけの課題ではない。幕府、そして全国の藩共通の課題であった。そして、この三点の政治課題は、独立した政治課題ではなく、相互に関連している。藩主は、相互に関連した政治課題に対して、具体的な対応策を打ち出していくことが求められる。

2 侍讀

喜多院にある川越城主松平大和守家廟所（写真）に、先々代直恒（俊徳院）の頌徳碑が建てられている。1835年（天保6年）に建てられたものである。これは、石井文衷（良平）撰であり、良平の肩書きは「本藩教授兼伴讀」である。この廟所は、川越市指定文化財史跡である。

『埼玉県史』では、石井良平は「講学所の教授と為って藩主の侍讀を兼ね」となっている。同じく、石井良平は講学所教授と藩主の侍讀を兼ねていたとされているのである。伴讀とは、藩主が読書する時に、その相手役を務めることをいう。侍讀とは、藩主に仕え、学問を教授する学者のことを指す。いずれにせよ、藩主松平齊典の学問の指導役、相手役であった。

川越藩儒となった時、石井良平は、40歳である。藩主齊典が跡を継いで2年後、齊典は22歳で

ある。石井良平は、若き藩主斉典の侍讀となったのである。その後25年、石井良平が歿するまで続く主従関係である。

石井良平が、御書物同心から、川越藩の儒者に転じた詳しい経緯は、もちろんわからない。しかし、御書物同心の跡を、弟の石井誠平が継いだことから、いくつかの推察は可能である。おそらく、松平斉典が儒者の後任を求めて、幕府に働きかけたのである。考えられる幕府の対応は、御書物奉行か昌平坂学問所儒者のいずれかによってなされたのである。学問吟味に乙科及第し、御書物同心であるということが、松平斉典の採用基準、召し抱えの基準に合致したのであろう。『日本教育史資料』には「松平斉典聘致する」と記されている。御書物同心では、御書目校正の係として、祭酒林大学頭（林述齋）の指示を受ける立場にもいた。

幕府側の窓口として、最も考えられるのが、鈴木岩次郎（白藤）である。学問所勤番組頭から、御書物奉行に任じられ、1812年（文化9年）から1821年（文政4年）まで務めたのである。学問所儒者の古賀小太郎（侗庵）の岳父でもある。鈴木岩次郎は、1818年（文化15年）の石井良平の転籍時に、御書物奉行であった。あるいは、長野豊山との関連で後に述べるが、古賀侗庵が仲介した可能性もある。もしかしたら、林大学頭自身の指示であったかもしれない。学問吟味及第者を現場に派遣するという人事政策の一環だったこともありうる。相模の海防を担う川越藩は、海防の要の一つだったのである。言うならば、現代のキャリア官僚が都道府県の副知事や上級幹部に出向することと類似している。

ただし、石井良平のように、幕臣から藩儒へ転じた例は、管見の限り他にない。

眞壁仁の大作『徳川後期の学問と政治』においては、「学界の最高峰の有識者である幕府儒者は、和漢古今の事柄に通暁していたがゆえに、じじつ外交政策決定の最前線にも立ち会っていた。

幕府儒者ばかりでなく、この時期藩校で育成された広義の「儒吏」が、全国の藩政の政策形成過程に直接参与した例は、恐らく枚挙に遑がないであろう。」としている。著名な事例として、米沢藩の上杉鷹山の藩政改革にも、藩儒者が大きな役割を果たしていた。

なお、川越藩の資料として、松平家記録（藩御用日記、以下「藩日記」）がある。これは、前橋、川越本城、江戸藩邸（1827年から）、相州陣屋（1820年から）、高輪陣屋（1853年から）などにおいて、藩の番頭や奉行等が毎日の政務や必要事項、家臣動静などを記録したものである。1748年（寛延元年）から1872年（明治5年）までに亘っている。原書は、前橋市立図書館に所蔵（写は埼玉県文書館にある）されている。このうち前橋記録については、『前橋藩松平家記録』として前橋市立図書館（編集阿久津宗二氏）から全40巻が刊行された（2007年に完結）。ただし、1767年の川越移転から1866年の前橋復帰までの約百年間の時期は、前橋での限定的な内容となっている。一方、藩政の中心である川越・江戸記録に、石井良平およびその家族は頻出している。

3 海防

松平齐典が藩主となり、最初の重大な試練は、1820年(文政3年)異国船の渡来に備えて、幕府が川越藩などへ相模国沿岸警備を命じたことである。さらに1822年5月2日、房州沖への異国船渡来につき、川越より相模へ警備の藩兵を出した。

大和守の領地としては、武蔵国、上野国だけではなく、相模国、上総国にも広く分散していたのである。そこで、幕府は浦賀奉行助役として川越藩・小田原藩に相模国沿岸警備を命じ、川越藩相州浦之郷陣屋が置かれることとなった。(川越市立博物館の『黒船来航と川越藩』(1998)など参照。相州陣屋の所在地は変遷している)

1825年(文政8年)、幕府は異国船打払令を命じる。藤田『近世後期政治史と対外関係』によれば、幕府の政策は、(1)頻繁な異国船の渡来は、国威を低下させキリスト教布教の恐れがあるので渡来を阻止する必要がある、(2)捕鯨船のために格別の防備態勢をとる必要はなく、その地の領主の有りあわせの兵力で二念なく打払う、というものだった。すなわち、「その地の領主」に責務が生じるのである。相模国沿岸では浦賀奉行と川越藩など周辺大名の援兵である。幕府としては、方針は厳重だが、海岸防備は強化しないということである。

1837年(天保8年)6月29日、アメリカ商船モリソン号が浦賀に来航し、相州陣屋詰の川越藩兵が出動する。この時は、浦賀奉行は異国船打払令に従って砲撃し退去させたのである。

1842年(天保13年)8月2日 江戸湾防備の強化策として、助役ではなく、川越藩に相模国海防を命じられる。同年薪水給与令(天保緩和令、後述)。これらをふまえて、川越藩は徐々に高島流の砲術を習得するなど、軍制改革を進めた。(布施賢治『下級武士と幕末明治』参照。)

1843年(天保14年)観音崎台場が川越藩に引き渡される。藩主齐典は、相模海岸を巡見する。相州陣屋に282人、大筒方として観音崎台場などに48人配置された。

1846年(弘化3年)アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドル浦賀に来航、川越、忍両藩警備につく。藩主齐典は相州陣屋で藩士の指揮をとる。

1853年(嘉永6年)ペリー浦賀に来航、川越藩等警備につく。その後、この年、川越藩は相模海岸の警備の任を解かれ、品川第一台場の警備を命じられる。あわせて高輪陣屋に移る。以降幕末まで江戸湾海防の任務は続く。川越藩は、幕府の江戸湾海防に深く関わり続けたのである。これは重要であり、川越藩は、江戸湾海防において特別な位置づけにあったのである。

4 川越からの移転

次の大きな課題として、藩財政の深刻な状況を背景に、松平齐典は川越からの移転について策を廻らすこととなる。藩財政の深刻な状況と知行替えについての分析は、森田(1982)に詳しい。

1825年(文政8年)、藩主松平齐典は、姫路への転封を策し、忍び、隠密を派遣して姫路の情勢をさぐらせる。姫路は、以前の領地である。

1827年7月2日、将軍家斉の24男紀五郎を養嗣子に迎える。紀五郎(松平齐省(なりさだ))

は將軍家斉の第53子である。藩主も矩典から斉典に改名する。

1828年松平斉典、幕府に姫路への転封を願い出る。この一連の動きから、紀五郎を養子に迎えたのは、姫路への転封願い出への布石であったとみられる。將軍徳川家斉は「稀代の子沢山」であり、ふさわしい藩への養子縁組を巡って、様々な動きがあった。

1834年（天保5年）水野忠邦が老中に就任する。後に三方領知替えを命じたのはこの人物である。

1836年1月23日後の九代領主、実子の誠丸（典則）生誕。

同年11月家臣に面扶持擬作すなわち半知借上げを命じる。いよいよ財政が緊急事態に陥ったのである。家臣の給与の半額を借り上げることである。

1837年家慶將軍に。家斉は「大御所」となる。

1838年（天保9年）8月 前橋帰城を願い出る。姫路への転封が進まず、前橋帰城に切り替えたとみられる。天保11年4月にも再度願い出ている。家斉の子である松平斉省も、天保9年8月の時に幕府に川越藩の窮状を訴える嘆願書を提出している。

『川越市史 3巻近世篇』によれば、天保11年4月の嘆願書の内容は、次の三点である。（元は「藩日記」）「第一は、川越城付領八万石余のうち、四万石を川越城付として残し、残る四万石を前橋城付と相模の陣屋付近、および安房・上総の沿岸に移すこと、第二は、廃城となっている前橋城を修築して帰城すること、第三は、寛延2年の前橋移封の時に問題となった伊勢崎領二万石分相当分を加増すること」このうち第三点については、「数回にわたり幕府に対して二万石回復を求めてきた経緯がある。」また、重要なことは「川越領も半減しながらも保持して居城を前橋に移すという要望であること、および幕府からは（その後）庄内移封を命じられるが、川越藩としては庄内領移封を嘆願してはいないという点である。」また、『川越市史』は強調していないが、「相模の陣屋付近」は維持し、なおかつ「安房・上総の沿岸」も含める要望であること、すなわち海防を担うことを明確にしていることである。

5 三方領知替え

しかし、幕府からは、姫路への転封、前橋への帰城ではなく、庄内への領知替えが命じられた。庄内は酒井家の領知が長く続き、豪商本間家の拠点酒田という良港による交易も盛んな、豊かな藩であった。

その後は、次のように推移する。

1840年（天保11年）11月 庄内藩酒井家・長岡藩牧野家との三方領知替え。

1841年（天保12年）閏1月 前將軍「大御所」家斉歿（69歳）。

1841年5月 水野忠邦の天保改革が始まる。

1841年5月4日 川越藩養嗣子紀五郎斉省歿（19歳）。

1841年6月7日 將軍家慶、三方領知替えの中止を命じる。

1841年7月12日 領知替え中止, 川越藩2万石加増(1842年(天保13年)から)。

1843年(天保14年) 水野忠邦失脚。

三方領知替えについては、多くの研究や書籍がある。玉突き式の領知替えであったことや、幕府の決定が覆されたことが、関心の的になっている。とくに、庄内藩の領民の一体となった反対の動きに注目が集まる。

最近の須田努『幕末社会』でも取り上げられている。

「1840年(天保11年), 出羽庄内藩領において、小前百姓だけではなく、村役人・豪農、豪商、僧侶といった幅広い社会層を結集し、なおかつ庄内藩はそれを黙認するという、じつに奇妙な一揆が発生した。三方領知替え反対一揆である。」

「財政破綻をきたしていた武州川越藩松平家が、この庄内に目をつけた。藩主の松平齊典は大御所家斉の実子齊省を養子として迎え、それを利用して庄内への転封を企画した。家斉はそれを実現させるため幕閣に圧力をかけたのである。

この転封を実行に移した人物が水野忠邦であった。政治的野心の強い水野は、強大な権力を維持する大御所家斉の関心を引き、点数を稼ぐ必要があった。」

この後半部分については、異論もある。川越藩は多くの研究で「悪役」扱いである。しかし、松平齊典は本当に「庄内に目をつけた」のであろうか。それまでの経緯を見ると、姫路への転封と前橋帰城のいずれかを願い出たのであり、「庄内」を願い出た可能性はあるのだろうか。「庄内」との領知替えを打ち出したのは、幕府の側、具体的には水野忠邦ではないだろうか。そして、その理由は、幕府が海防の拠点を日本海側にも求めて、庄内藩の酒田港、長岡藩の新潟港を収公、幕領化することにあつたのではないだろうか。事実、新潟港は1843年(天保14年)上知(収公)され、後に開港される。

しかし、川越藩、藩主松平齊典は庄内に「目をつけた」悪役となってしまう。実際には、青木美智男(2007)「天保十一年三方領知替の意図と川越藩の動向」にあるように、「川越藩は豊かな藩領への転封を「内願」=内々に懇請し、それに実父(大御所家斉)・実母(齊省の母お糸の方)らが応えたことは事実のようだが、川越藩自らが庄内藩への移封地として名指し希望したわけではないことが分かる」というのが正しい理解であろう。上白石実『幕末期対外関係の研究』も「松平家が転封先として庄内を希望したという史料は管見の限りなく」としている。(他にも前述したように『川越市史』や森田(1982)も同様の見解を述べている)もちろん「御内沙汰」が届き次第、庄内に忍び5人を送り込んだのは事実である。

こうした中、庄内領民の反対運動とともに、仙台藩・水戸藩など諸大名からの懸念も示された。領知替えの理由が示されておらず、理由もなく領知替えされるのか、といった今後の幕政に対する不安感、不満が高まったのである。

翌年大御所家斉が歿したこともあり、三方領知替えは中止となった。6月7日に將軍家慶が中止を命じたのである。理由としては、庄内領民が、大和守家の財政悪化、収奪強化を不安視し、

新領主を歓迎していない、忌避行動があることが挙げられた。これまで幕府が決めたことがこのように覆されたことはなく、幕府弱体化の始まり、権威の失墜という見方がなされるようになった。北島正元「三方領知替」と上知令」では、「將軍の全国支配権の動揺を端的に示すものであり、とくに農民の反対運動によって中止されたという点で、幕藩制の解体のまぎれもない徴証の一つとみられるのである。」と評価している。

老中水野忠邦はこの中止に強く反対し、6月10日に反対論を提出した。その理由は、幕府が一度決めたことを覆すべきではない。將軍に領知の決定権があるのであり、藩は絶対に従わなければならない、という原則論であった。將軍家慶は、7月11日に水野忠邦と老中真田幸貫を呼び出して、領知替え中止を命じた。これに従い、7月12日に水野忠邦は川越藩、庄内藩、長岡藩に中止を申渡した。しかし、翌13日には「無念の思い」を老中土井利位に伝え病気を理由に引きこもってしまった（青木（2007））。その後、將軍家慶や他の幕閣に慰留され、老中に留まり、天保の改革を強力に進めることになったのである。（町奉行鳥居耀蔵が実行役となっていた。鳥居は、林述齋の実子である。）

推測ではあるが、幕閣全体が三方領知替えに賛同していたわけではないのだろう。家斉-水野忠邦のラインが強硬に進めたのだが、家斉の逝去によって、幕閣内の現実派が勢力を取り戻したとも考えられる。1841年（天保12年）6月7日の家慶の中止命令を根回ししたグループである。中止命令は、「三老中（土井利位、堀田正篤、真田幸貫）の名で水野忠邦に伝えられた」（青木（2009））

この時期の薪水給与令（1842年（天保13年））の決定プロセスにおいても、藤田『近世後期政治史と対外関係』によれば、「幕府内部で評議した形跡が認められない。」「三人の専断により決定された」ということである。水野忠邦と二人の老中である。当時の他の老中は、土井利位、堀田正篤、真田幸貫などである。それまでの対外関係に関する意思決定が、三奉行（町奉行、勘定奉行、寺社奉行）および儒者（林大学頭）あるいは大小目付、勘定吟味役などに諮問する形式をとっていたのとは、全く異なっている。

三方領知替えの決定プロセスも、そういう「専断」だった可能性がある。藤田『幕藩制国家の政治史的研究』でも「若年寄林忠英留守居荒川義蔵の説として「所替は水野忠邦が一人で決定したこと」とし、若年寄水野忠貫家臣小原重次郎の説として「大御所家斉が一存で決定したことであり、水野忠邦はやむなくそれに従った」としている。現実派は、この「専断」から外されたグループである。

旗本新見正路は、この時期、將軍の御側御用取次であった。その文書がよく取り上げられている（青木（2009）による）。三方領知替えの中止命令の下書き草案である。青木（2009）によって、かみ砕いていえば次の通りである。「家慶の決定を受けて国替え中止を忠邦に説得しにやって来たのは、新見正路と側用人・堀親審（忠邦と姻戚関係）だった。その会話のなかでも、海防問題は俎上に載せられたに違いない。彼らが忠邦に、「三方国替えを中止する代わりに、（いつも忠邦が口にしてきたであろう）新潟・酒田港の収公を認めよう。だからこのさい妥協せよ」と迫った

可能性は、低くない。おそらく、彼らは次のように判断した。三方国替えをやめる代わりに、以前からの懸案事項であったもっと大きくて難しい政策—海防を名目とした酒田港と新潟港の幕府領化—を断行したとしても、人々は「天意人望に叶う」処置だと考えてくれるだろう。(アヘン戦争の)中国の敗戦はすでに民衆にも知れわたっており、たいへんな事態が到来するかもしれないという不安は全国に広がりはじめている。港の直轄化はおおむね妥当と受けとられるに違いない。」(前述のように、新潟港は実現し、酒田港は実現しなかった)

なお、町奉行であった筒井政憲は1841年(天保12年)4月28日に左遷されている(後日阿部正弘政権で復帰する)。また、林述齋は1838年(天保9年)11月に、大学頭を次男禊宇に譲り、大内記を名乗った。そして、1841年(天保12年)7月20日歿する、享年74歳であった。遠山景晋もすでに1837年(天保8年)7月22日に歿している。この時期、対外政策の意思決定プロセスに長い間携わっていた学問所系の人脈が弱体化していたのである。こうしたことも背景にあった可能性がある。

それでは、幕閣内の現実派は、どのような理由から反対したのだろうか。大御所家斉の情実による不公平に対する不満、庄内の反対運動や仙台藩などの大名家からの不満も確かに大きい。しかし、それだけではない。その理由は、川越藩の特別な位置づけにある。それは、海防上の理由である。川越藩は江戸湾の防御を相模側から担う藩として明確に位置づけられていたのである。長岡藩牧野家を転封したとしても、稼働するまでには長期間かかる。その間の相模防御をどうするのかということである。幕閣内の現実派にとっては、川越藩は「転封してはならない」存在だったのである。(同様に房総側では忍藩が位置づけられていた)

事実、三方領知替え中止後の1842年(天保13年)、川越藩は、それまでの浦賀奉行助役の立場から、相模国海防を命じられる。海防と領知替え中止は切り離された課題ではなく、一体となった課題だったのである。そして、中止に伴い、表向きは1838年(天保9年)の斉省の嘆願に応えるということで、川越藩には、2万石の加増が認められた(といっても、5月には斉省は歿していたのだが)。この2万石の加増ということは、もともと、前橋転封のさいに2万石少なく拝領したという川越藩のこれまでの度々の主張が通った可能性がある。

(三方領知替えについては、藤沢周平『義民が駆ける』など文学作品にも取り上げられている。また、藤沢作品については、歴史家の側から、青木美智男『藤沢周平が描ききれなかった歴史』という書籍がある。)

6 藩校

(1) 藩校の全国動向

三番目の課題は藩士の教育、士風の刷新である。まずは全国の藩と藩校について見ていこう。

明治4年までに、全国に藩校が255校設置されている。特に、寛政—文政期(1789年—1829年)には87校と最多となっており、次いで天保—慶應期(1830年—1867年)の50校となっている。

表2 藩校設立

	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
寛文-貞享 1661-1687	1				1		2	4
元禄-正徳 1688-1715			2	3		1		6
享保-寛延 1716-1750	2	3	2	3	4	2	2	18
宝暦-天明 1751-1788	7	2	10	5	9	2	15	50
寛政-文政 1789-1829	12	15	15	20	7	7	11	87
天保-慶應 1830-1867	5	14	16	13			2	50
明治元-4 1868-1871	3	11	7	13	1		1	36
年代不明		4						4
合計	30	49	52	57	22	13	32	255
藩校の存在不明の藩	2	4	5	2	5	3		21

これは、中後期とくに寛政の改革以降に、藩政改革の一環として、藩校の設立が行われたという側面を持つ。幕府の「寛政異学の禁」、昌平坂学問所の確立、学問吟味による人材の能力評価と活用による教育の制度化が、各藩に普及・浸透していったのである。辻本（1988）は、「とりわけ十八世紀後半期は、明らかに儒学史上の大きな画期である。儒学が初めて本格的に、武士の社会に（そして一部民衆社会にも）普及し浸透した時代とって誤りない。儒学が武士の基礎的教養とみなされ、全国的に藩校の普及と質的充実がみられるのが、この時期なのである。それは、「教育爆発」の始まりとといった観さえある。」と述べている。

以下に述べるように、それは一直線に進んだわけではなく、多様な展開であり、多くの障害もあった。しかし、幕府だけではなく、全国の藩の大半が藩校を設立していたということは、その拡がりによって、近代明治以降に大きな影響を与えたと考えられる。

(2) 藩校と藩政改革

藩校の設立は、藩校の教員としての藩儒が、活動する場が設定されたという意味を持つ。藩儒は、国許の藩校での教育のみならず、江戸藩邸内の藩校での教育、さらには御前講釈などの職務を担った場合もある。宇野田（2007）は、「「儒者」とは、儒学的知識を身につけ、それをよりどころにして世を渡り、身分間移動をも果たしたような中間的知識層の人びと」と定義づける。

そして、それらの活動が、藩政改革へと展開したこともある。著名な事例として、笠谷（1993）も事例として取り上げている、米沢藩9代藩主上杉鷹山による藩政改革は、1776年（安永5年）の藩校興譲館の「再興」とともに進められ、藁科松柏・荻戸（のぞき）善政・神保綱忠などの藩儒が執政の中核にあった。

やや時代は下るが、磯田（2002）は、幕末鳥取藩池田家を事例として、藩校教育を重視した人材登用の仕組みづくりへの試みを詳細に実証している。鳥取藩では、1853年（嘉永6年）のペリー来航時における藩の軍事的対応をきっかけに、門閥世襲批判の提言が広まった。水戸藩から養子

に入った藩主慶徳自身が、まったく軍事的知識のない門閥重臣が指揮権を持つ状態に大いなる危機感を持った。

人材の登用は、いかなる方法でなされるべきか。鳥取藩では、藩校の拡張がなされ、藩士全員の出席が義務づけられることから、着手された。家老から足軽までの出席を強調し、学校内では、身分よりも年次を優先することとなった。しかしながら、下級藩士は熱心に出席したものの、家老はじめ上級藩士は、出席を拒み、当初の目論見は実現しなかった。そこで、1860年(万延元年)から学校改革に着手し、(1)学館(藩校)を寄宿制に、(2)学館に、藩人事への関与を認めること、(3)学館にも、藩士への懲戒権を認めることなど、出席率を上げるために、人事面に関与することとなった。さらに、1861年(文久元年)から、藩士人事において、学校推薦の制度が発足した。武官・文官ごとに推薦基準を定め、「出格の撰」を目的としたのである。しかし、1864年(元治元年)改革の推進者の暗殺などもあって頓挫し、門閥政治が復活した。

磯田(2002)も指摘するように、この試みは門閥などのアリストクラシーから、能力主義による人材活用のメリトクラシーへと転換を図る一つの試みであった。(江戸時代のメリトクラシーについては、笠谷(1993)、笠谷(2005)、笠谷(2007)などが明確な視点を提示している。筆者も、石井(2009)、石井(2013)で論じた。)

磯田は、その転換に藩校が重要な役割を果たすとし、次の四段階で進展するとした。(1)文武興隆のため学校が設立される(藩校設立)、(2)学校への藩士の出席が義務化・強制される(出席強制)、(3)学校での修業が人事に反映される(人才選抜)、そして(4)寄宿制の閉鎖環境で士官教育がなされる(全寮制士官学校)である。

藩校設立は多くの藩で実現したが、(2)以降は多くの障害があった。上昇志向の強い下級武士は藩校出席に熱心であったが、既得権益を持つ上級武士は、能力評価につながることを恐れ、出席を拒否した。さらには人才選抜には多くの抵抗があり、寄宿制は実現に至らなかった。

(3) 幕府から藩校への普及過程

幕府における昌平坂学問所の確立、学問吟味の実施による教育の制度化、さらには人材登用の具体化は、各藩へと普及していった。そのためには、(1)まず、藩校を設立すること、(2)「異学の禁」などカリキュラムを明確化すること、(3)藩士の多くの出席を実現すること、(4)学問吟味など試験制度を確立すること、(5)試験の成績と人材登用を関連づけること、などが段階的に追求される。(2)については、朱子学とは限らない。例えば庄内藩致道館では、徂徠学を遵守していた。(3)–(5)は前述した鳥取藩のように、抵抗が大きく、実現には困難を伴っていた。

幕府から藩への普及について、辻本(2002)は、「注目すべきは、昌平坂学問所が「書生寮」を設けたことである。そこに幕臣に限らず、全国諸藩の好学の武士にも入学を認めた。これは、昌平坂学問所が武士教育の中央の「学校」(大学)の位置を占めたことを意味している。以後、幕府

の学問所（書生寮）で学んだ儒者を教官に迎える藩校が漸増していったのはその結果である。寛政以後、幕末にかけて（十九世紀）、朱子学が学問と教育の中軸となり、幕府や諸藩の知的活動と公定イデオロギーは、ほぼ朱子学を前提にしていた。」と述べている。

7 講学所

(1) 川越藩の儒者の変遷

それでは、川越藩における藩校、儒者などの教育制度については、どのような推移をたどっていたのだろうか。

1814年（文化11年）3月7日、川越藩儒であった佐藤用之助（登）歿。佐藤用之助は、号を節斎という。（『国書人名辞典』による）後に1822年7月、松平大和守家来佐藤千之助（佐藤用之助の子）書生寮入学之儀申込、の記事が「昌平坂学問所日記」に載っている。しかし、佐藤千之助が儒者に登用されたという記事はない。

1815年（文化12年）朝岡文之助の斡旋で、大沢権助・杉村易助召抱えられる。佐藤用之助の後任である。

朝岡文之助は、姫路以来代々松平大和守家に勤めた家で、文政5年に歿した後は、朝岡操が儒者を継いでいる。

大沢権助（あるいは権之助）は、「升堂記」（林家）に1797年（寛政9年）正月25日「大沢権之助（上州桐生処士）升堂、紹介北村徳之助」とあるように林家に学んでいる。1777年（安永6年）生まれで、1865年（慶應元年）89歳で歿している。号を赤城という。（『国書人名辞典』による）3年後の1818年に脱藩し、後に川越藩に再登用されるが、再び追放される。

杉村易助（あるいは易輔）は、1761年（宝暦11年）生まれで、代々尾張知多郡に住み、父道清の代に江戸へ出府した。1818年（文化15年）歿した。名は健、号は勉庵などという。崎門学派である。（『国書人名辞典』などによる）杉村易助の子が、正光院の石井良平の墓に「杉村輪謹書」と記した杉村輪之助である。

1816年、松平齊典が跡を継ぎ、藩主となった。

ところが1818年（文化15年）大沢権助脱藩。6月杉村易助病死（輪之助が跡を継ぐ）。教育制度の要となるべき儒者が欠ける状況に陥ったのである。

そこで、石井良平（江戸詰）、今井八郎（川越詰）の両名が新規に召し抱えられる。前述したように、石井良平は「聘致された」のである。同時に召し抱えられた今井八郎は、「升堂記」に「今井八郎改め晋（江戸処士）升堂、口入佐藤捨蔵（一斎）」の記録がある。やはり林家で学んだのである。

(2) 長野豊山

1821（文政4）年、今井八郎（晋）御暇。わずか3年であった。代わりに長野豊山召し抱えら

れる。

長野豊山(友太郎)については、富士川英郎が「儒者の随筆」の中で、「松陰快談」を取り上げている。その中で、「学識の深いことと、狷介な為人(ひととなり)とによって、かなりその名の聞えていた儒者であった。」としている。「— 豊山は文化元年の秋、京都に遊んだのち、翌二年の春、江戸に出て、昌平校の学舎(書生寮)に寄寓しながら、尾藤二洲に師事して、その塾に学んだという。— ところで、長野豊山は文化十年、神戸の本多侯に儒官として仕え、しばしばその藩政にも関与していたらしいが、その狷介な性向は人々の容れるところとならず、文政二年にはついに致仕した。」「それ以後、豊山は京都や江戸で塾を開いて、徒弟に教えながら余生を送っていたが、天保八年八月、五十五歳を以て、江戸で歿したという。」

最後の一文については、川越藩儒としての時期があったことが、脱落している。

森銑三(1989)の「長野豊山」は、史料編纂所所蔵の影写本「長野文書」中に、諸家の豊山に宛てた書簡が十余通ある内からその幾通かを紹介している。ここで、着目したいのは、二点である。

まず、第一に、尾藤二洲(良佐)からの書簡である。前述したように、二洲は豊山の師である。後に二洲の「素餐録」の序を、1836年(天保7年)長野豊山が記している。

二洲の書簡の文末に、

「— 五月三日、尾藤良佐、長野儀一様(豊山)。

尚々余事は良平より得御意可申候。此他弊家其外皆無異状候。草々」

と記されている。尾藤二洲の弟子として、「良平」が登場してくるのである。

第二に、昌平坂学問所の儒者・古賀侗庵の豊山あての書簡である。時候の挨拶の後に、

「— 然ば 敵門平野鎌五郎儀に付、段々御煩勞を奉掛、何とも恐悚之至に奉存候。先達ても貴藩高橋三平敵慮え被立寄、鎌五郎儀懇々被申聞、—」

と記されている。要するに、侗庵の弟子平野鎌五郎が、豊山に迷惑をかけたことを詫びているのである。

「豊山は文化十年三十一歳にして、儒学を以て神戸侯本多忠升に仕へ、文政二年三十七歳にして辞去するまで、その藩に在った。— 慶応大学図書館に蔵する『侗庵日記鈔』のこの日の条を見ると、「三月八日(文政二年)、平野鎌五郎が罪を宥恕する書状を長野豊太郎(ママ)迄差出す」としてあって、果して推定と適合する。但し私はまだその平野生のことについては全く知るところがない。」(森(1989))

神戸侯とは、伊勢国神戸(三重県鈴鹿市)であり、1732年(享保17年)から幕末まで本多氏の領知であった。1745年(延享2年)から1万5千石の小藩である。五代忠升(ただたか)は、「学制改革により教育機会の拡張につとめた。学校は江戸のほか城内二ノ丸門前御用屋敷に設けられた(教倫堂)。」「文化9(1812)年、— 忠升は古賀精里に朱子学を学んでおり、学風も朱子学に一新されたのである。江戸藩邸では進徳館が置かれ、朱子学が採られていた。」(『近世藩制藩校

大事典』)

しかしながら、長野豊山は、神戸侯を辞し、頼山陽のいる京都へ居を移してしまう。侘庵の続く書簡にも、平野鎌五郎が出てくる。

そして、長野豊山は、「文政四年辛巳には河越（川越）に赴いていることが知られるのである。」（森銑三（1989）森銑三の指摘するのは、文政7年9月「長野友太郎 森本に居る。今は川越侯に仕う。」（松崎慊堂『慊堂日曆1』）の記事である。文政8年11月にも同様の記事がある。

それでは、平野鎌五郎とは誰であろうか。他に二ヶ所で、この人物は登場してくる。

第一は、「昌平坂学問所日記I」である。1813年（文化10年）9月13日に、「一詩業兩人ニ而相勸、千駄ヶ谷御塩硝蔵定番徳次郎弟平野鎌五郎寄宿稽古申込候ニ付講釈・詩作相試み、寄宿致させ苦ヶ間敷旨寄宿頭取江金之丞申達之」

と記されている。兩人とは、金之丞（増島）・小太郎（古賀侘庵）である。

第二は、古賀侘庵の「読書矩」である。長澤規矩也によれば、この「読書矩」は、文化12年自序があり、天保元年刪正されている。「平野石井二子問」、すなわち「門人平野某・石井某の請に応じて、入門の書、上堂の書、入室の書に分けて書名を列し、時に読法、参考書を注記、終に読書の法を箇条書風に述べた書」（長澤）である。平野鎌五郎が、文化10年9月に寄宿稽古を認められ、しかも試験を行ったのが、古賀侘庵であったことから、この「門人・平野某」は平野鎌五郎と推測できる。その平野鎌五郎が後日、長野豊山に迷惑をかけ、師の侘庵が書状で「宥恕」したのである。

「門人・石井某」は誰であろうか。「昌平坂学問所日記」に、この時期登場してくる石井姓は二人しかいない。石井良平・誠平兄弟である。

1814年（文化11年）前述したように「7月3日石井良平弟誠平寄宿申込ニ付今日試」の記事が「昌平坂学問所日記I」にある。当日の当番儒者は、源太左衛門（依田）・小太郎（古賀侘庵）である。試験の結果は書かれていない。良平は、既に文化3年学問吟味乙科及第であり、この時は御書物同心である。従って、文化12年の「門人・石井某」は弟の石井誠平と推測できる。

推測が重なるが、平野鎌五郎の件で、長野豊山に迷惑をかけた古賀侘庵が、神戸藩を辞めた豊山の儒者としての就職を、石井誠平の兄であり、同じ尾藤二洲門下であり、昌平坂学問所出身者の石井良平に依頼したのではないだろうか。石井良平は、文化15（文政元）年に、川越藩儒者に転じている。その縁で、長野豊山も文政4年川越藩儒者となった、と考えられる。そうであれば、仲介したのが、古賀侘庵であることは重要である。

しかし、1827年（文政10年）、長野豊山は川越藩を御暇となってしまう。6年の勤続であった。その「狷介」な性格が災いしたのであろうか。豊山は10年後の1837年（天保8年）、55歳で歿した。

(3) 講学所設立

「この時期、川越においては京都から長野友太郎（豊山、のち江戸詰）、豊山の門弟の藩士保岡英蹟（還俗して元吉と改名、号嶺南）、石井良平を城下詰とし、杉村輪之助（易助の子）、朝岡操（文之助の子）、石井豊太郎（良平の子）らを江戸詰とするなど、教学推進のための多くの人材を持つに至った。こうして、文化・文政期に表面化した退廃する士風の刷新と財政困難で動揺する藩体制の建て直しを意図する、藩主斉典による藩校設立の背景が整って来るのである。（大藤確操『藩史材料』）」（『群馬県史 通史編6 近世3』執筆者駒形義夫（当時前橋市立敷島小学校教頭））

「文政10年（1827年）7月、川越に講学所が設立された。それに先立ち文政8年には江戸赤坂溜池の上屋敷に学問所が設けられたようであるが、つまびらかではない。

川越の講学所の設立は、文政10年3月に、藩が石井良平に講学所設立の計画書作成を命じたことから始まる。計画は、江戸の講学所程度の小規模とし、石井良平の川越詰以来の住居であった大場津門跡屋敷を充て、諸経費も切り詰めるものとしている。（「松平藩日記」前橋市立図書館所蔵）しかし、文政10年7月24日に発足した川越における講学所については、その位置を知るだけで、規模・構造を知る手掛かりがない。正式発足前に大場津門跡屋敷に講学所仮屋ができ、のちに増築などが行われて正式のものとなったようである。また、江戸上屋敷、高輪陣屋や分領地の武州松山（埼玉県東松山市）にも分校を置いたという。（大藤確操『藩史材料』）」（『群馬県史 通史編6 近世3』）

1823年（文政6年）保岡元吉（嶺南）、還俗して儒者に登用。保岡元吉は、1803年（享和3年）、川越の高家に生まれ、藩医の保岡家に養子に入り、医師となっていた。この年は20歳である。1868年、65歳で歿する。

1824年（文政7年）長野豊山、江戸詰を命じられる。江戸表勤務の石井良平川越へ。

1825年（文政8年）石井良平、杉村輪之助、石井豊太郎等の江戸藩邸の講学所（江戸）出勤。藩日記文政8年11月12日記事。「おそらくその直前に江戸講学所の設置を見たと思われ、その企画は石井良平によって行われたと考えられる。——」（『埼玉県教育史』）

1826年（文政9年）石井良平、一ヵ年川越詰を命ぜられる。

1827年（文政10年）7月2日松平斉典、川越藩藩校講学所（博諭堂）創設。石井良平（教授）、設立の中心となった。（教授は石井良平・保岡元吉・朝岡操すなわち「教授三員」）8月12日より授業開始の旨を触れる。朝岡操川越帰任。一方、長野豊山は御暇。開設後、杉村輪之助、川越に帰り、教授となる。

講学所では、次のような教育が行われた。基本は朱子学である。

「旧前橋藩学制

松平齊典ノ代博諭堂創立ノ節ノ布令

兼テ被仰聞置候講学所之儀仮也御取建普請出来ニ付來月十二日ヨリ相始候依之一統罷出相学候様可被致候御場所柄之儀面々別テ礼讓厚相心掛狎り成義無之様可被候委細之儀ハ別張（帳）ノ通可被相心得候

（別帳）

一当時素讀ノ儀ハ不致候事

一講学所役々左ノ通被仰付候事 学監兩員 教授三員」

「教則 教導ノ大頭腦ハ 儒臣石井文衷（良平）ニ命シ」

「讀法ハ一ニ石井文衷（良平）ノ定本訓式に拠テ授ク」

「石井良平 文衷字子若擇所ト号ス藩学教授トナリ禄二十人口ヲ賜ヒ番抜ニ列ス齊典聘致スル所ナリ著ス所小学摘解十卷其他四書五經訓式定本等アリ嘗テ尾藤二洲ノ門ニ遊フト云」（日本教育史資料）

講学所の教育は、石井良平が教則、讀法を定めたのである。

「学規を定め、白鹿洞書院揭示を講堂に掲げて、朱子教説に基づく教育の基本方針を明示した。」

「教授石井擇所（良平）が、齊典の命に依って作りし読書次第は、講学所に於ける教科書目を列挙して講学の順序を示すと共に、教授の方法、学生の心得をも説いているから、その内容を窺うに足るものがある。」（群馬県史）

「（石井良平は）齊典に聘されて川越に來たり、講学所の教授と為って藩主の侍讀を兼ね、二十人扶持を給せられて番抜に列した。命を受けて教授の主旨と教科の課目を定めて講学所の条約及び読書次第を撰して居るが、永く革むることなく遵奉されし所で、創業に際して其功の大なるものがある。——講学所に於ける素讀の教授は専ら其（良平の）訓式定本に依ることと為った。」（埼玉県史）

（4）石井良平の著書

『国書総目録』によれば、石井良平（擇所）編の「小学摘解」は、東大（万延元年写12冊）、無窮会平沼図書館（1冊）に現存する（未読）。また、「小学本註摘解補」22巻首2巻52冊は、内閣文庫（国立公文書館）に53冊（天保2年筒井忠英写、小学讀法或問卮言を付す）現存している（未読）。及び京大図書館に稿本52冊（天保2-3校、巻8欠、こちらも筒井忠英写、小学讀法或問・小学或問卮言を付す）が現存している（これは瞥見）。

筒井忠英は幕臣旗本であり、石井良平と同じく学問吟味の乙科及第者（1828年（文政11年））である。儒者となった杉原平助、ペリー來航時の浦賀奉行となった戸田氏栄と同年の旗本乙科及第者である。

「五經訓式定本」は、「近世漢学者著述目録大成による」となっており、現存していない。他の資料では、「四書訓式定本」も著している。いずれも儒学の教育書とみられる。

なお、「講学所を一般に博諭堂ともいっているが、これは講学所設立当初から用いていたわけではない。「松平藩日記」の中では、明治元年(1868年)12月の藩の学制改革の布令に「講学所を博諭堂と改める」とあるので、それまでは正式名称ではなかったとみられる。また、講学所の職制によれば、「教授」は「講釈以下講学所の主役、素読はしない」となっている(『前橋市教育史』上巻より作成)。教授には儒者を任じ、番士の上の番抜格。助教は番士もしくは儒者から任じた。教授と助教には、任命時に若干の書籍料と弁当代も下賜された(大藤確操『藩史材料』)。(『群馬県史 通史編6 近世3』)石井良平は、番抜格の教授であった。

8 石井家の動向

1821年(文政4年)10月29日、父・太郎左衛門歿す。法諡玉泉院智流鯉山居士、正光院に葬る。このことは、「御書物方日記」にも載っている。御書物同心である弟石井誠平が「忌に服している」。石井良平は基本的に定府すなわち江戸詰めが長く、父母とともに暮らしていたと考えられる。太郎左衛門は、備前か備中に生れ、江戸に出て、幕府御家人(御持弓組与力)となったが、良平が御書物同心に召し抱えられた後、隠居生活に入ったのではないだろうか。正光院の墓誌に、鯉山翁と記されている。また、家譜によれば、「麻布日ヶ窪の藩邸に居る」と書かれている。しかし、川越藩中屋敷が麻布市兵衛町にあったが、日ヶ窪とはやや離れている。麻布日ヶ窪に、川越藩江戸詰めに住居があったのかもしれない。

1827年(文政10年)10月19日、母(中山氏)歿す。母は備前仕官(岡山藩池田氏)中山總右衛門の娘で、太郎左衛門とともに、江戸に出たと考えられる。正光院に葬る。この年は講学所設立のため、良平は川越に滞在していた。

1833年(天保4年)3月13日 良平室(川崎氏)歿す。正光院に葬る。(藩日記(江戸)にも掲載)六男二女。良平はその後再婚したが、子供はいなかった。

良平と室(川崎氏)との間の男子は、長男豊太郎(脩太郎)、次男讓二郎、三男禮三郎、四男欽四郎、五男保五郎、六男玄六郎である。

1836年(天保7年)、石井良平の三男石井禮三郎、次男の石井讓二郎の養子となる。前章で述べたように、石井讓二郎は石井誠平の跡を継いだ御書物同心、すなわち幕臣である。ただし、「御書物方日記」には、1831年(天保2年)正月2日の勤務記録が最後である。「御書物方日記」自体が、1831年7-12月から、1840年(天保11年)まで欠落しているため、この間の経緯についてはわからない。後に石井禮三郎は、平塚に移住し、民間の塾を営み、かたわら医業に従事する。現在の石井家は、この禮三郎の子孫である。

1836年(天保7年)、石井良平の長男石井豊太郎は、通称を脩太郎あるいは修太郎と改名した。名は孝緯という。脩太郎は、1811年(文化8年)3月14日生れである。1824年(文政7年)に「漸く成人」の記事がある。天保7年は25歳である。一時期、古賀洞庵の下で修業している。幕臣ではないので、昌平坂学問所に入ったわけではなく、書生となったと考えられる。

9 その後の藩校と石井良平

1832年（天保3年）朝岡操、一時教授を辞任。その後復す。大沢権助帰参、教授となり、川越に赴任する。

1833年（天保4年）給帳による家臣団の中に、役知 20人 石井良平（其身一代無上納）の名が見える。無上納ということは、家臣に課せられていた半知借上げがなかったということである。ただ、藩財政の悪化に伴って、無上納の取り止め、すなわち上納することを申請している。同じく、役知朝岡操（25人）、保岡元吉（20人）、杉村輪之助（20人）、大沢権助（20人）がある。

1835年（天保6年）11月から、石井良平、保岡元吉、朝岡操の各教授が、久永助三、厚木喜多治を助手として訓点の統一を行った。久永助三は、後に前橋奉行となる。保岡元吉江戸定府になる。

1836年（天保7年）未曾有の凶作によって、講学所一年休止。

1837年（天保8年）講学所規模を縮小して再開。朝岡操、杉村輪之助教授辞任。

1839年（天保10年）大沢権助追放。朝岡操教授に復す。

1840年（天保11年）庄内・長岡との三方領知替え。講学所休止。

1841年（天保12年）7月12日領知替え中止、2万石加増（天保13年）。講学所、素読のみ再開。

庄内への所替において、家中分限帳では、番抜儒者として、杉村輪之助（川越で登用、丸馬場）、石井良平（川越で登用、定府）、保岡元吉（白川（白河）で登用、定府）、朝岡操（姫路で登用、御廊下）となっている。また、儒者隠居として、元吉父定府保岡常星が掲載されている。

番抜とは、川越藩の身分において、士分の中でも役付に位置づけられている。儒者や武術師範などが該当する。他の役付は、大目付、町在奉行、勘定奉行、物頭、組頭、目付である。役付は、諸士から任命されたが、諸士は幕末期にはおよそ165人余いた。（布施『下級武士と幕末明治』）

10 石井良平歿す

1842年（天保13年）正月11日 石井良平、江戸で歿（病死）。年65歳。正光院に葬られた。

1842年（天保13年）正月19日、保岡嶺南（元吉）日記書き始められる（1868年（慶應4年）まで書かれている。前橋市立図書館に寄託。阿久津聡「前橋藩藩校博諭堂教授保岡嶺南の日記」『群馬文化』239号）。そこに良平歿後の石井家のことが書かれている。阿久津論文から、天保13年の関連する部分のみ抜き出してみる。

同年2月13日「未後迄講堂、夫ヨリ石井ニ行」3月3日「石井修太郎明日四ツ時半同道之御用之旨申来ル、井村玄哲も同様之事申来ル」3月4日「今日修太郎遺跡被下、井村も玄適之跡百石ニたつ」（井村は医師）3月10日「石井修太郎去ル六日家督御礼申上候ニ付勤向之事ニ付来ル」3月29日「同刻より御殿ニ而修太郎助教被仰付候ニ付而也」5月3日「次修太郎被召出御意」5月4日「修太郎江流可申間も無之場ヲ以断ル」。

すなわち、良平の長男石井脩太郎（もとは豊太郎。修太郎と書く場合もある）が、良平の跡を継ぎ家督を相続したのである。さらに、江戸の講学所で助教を仰せつかり、保岡嶺南の下で働き始めたということである。「石井二行」は、麻布日ヶ窪の家と思われる。

しかし、この5年後、悲劇が石井家を襲う。1847年（弘化4年）4月石井脩太郎が、持病を苦に、自刃するのである。享年36歳であった。5月家は断絶処分となり、弟石井欽四郎は杉村輪之助に、弟石井元侗（保五郎）は菅沼家へ預けられることとなった。「擇所府君墓誌」においては、「不幸遭家禍，兄弟亡散，班秩喪失」と記されている。

第四章 その後の石井家

1 時代の区切り

幕末から明治のはじめにかけての幕府、明治政府、川越藩あるいは前橋藩、藩校講学所の主要な動向は、次の通りである。

1843年（天保14年）杉村輪之助、相州出張。おそらく相州陣屋に藩校の分校を開設し、その教員として派遣されたのであろう。

同年、幕府では、水野忠邦が失脚し、阿部正弘が老中首座となった。

1844年（弘化元年）川越版「日本外史 全22巻」（頼山陽著、保岡元吉校刻）開版。

1846年（弘化3年）朝岡操、相州出張。杉村輪之助川越へ帰り、教授に復す。

1847年（弘化4年）相模国（江戸湾）警備を命ぜられる。

1848年（弘化5年）朝岡操、講学所に復す。

1848年（嘉永元年）松平斉典、川越城本丸御殿造営。

1850年（嘉永3年）1月23日松平斉典歿する（53歳）。喜多院に葬られる。松平典則（誠丸）跡を継ぐ。

1852年（嘉永5年）11月朔日、「昌平坂学問所日記」によれば、書生寮に保岡正太郎入門（松平誠丸（典則）家来）。紹介河田八之助。保岡正太郎は、保岡元吉の子息である。第一章で紹介した「擇所府君墓誌」において、「門人保岡正墳」として、石井良平の墓誌の文章を書いた人物である。

1853年（嘉永6年）6月3日ペリー浦賀に来航。

同年11月14日 川越藩、品川沖第一台場防備を命じられる。高輪陣屋を設置する。

1854年（嘉永7年）8月13日松平典則致仕し、松平直侯跡を継ぐ。直侯は水戸・徳川斉昭の八男である。

1855年（安政2年）財政難のため、講学所一年間休止。朝岡操遠慮。

1857年（安政4年）-1858年（安政5年）講学所再び整備。

1861年（文久元年）8月15日松平直侯、23歳で歿し、喜多院に葬られる。12月6日松平直克跡を継ぐ。直克は、久留米藩有馬玄蕃守頼徳の五男である。

1862年（文久2年）教授朝岡操、杉村輪之助。

1863年（文久3年）松平直克、幕府政事総裁職に就任する。

1867年（慶応3年）3月1日松平直克、前橋城再築し、移転。（1866年12月7日本丸完成、約百年ぶり）講学所も前橋に移転し、その後博諭堂と正式に命名される。

川越藩は、陸奥棚倉から松井松平家が領知替えとなり、松平康英が藩主となる。

同年10月大政奉還。1868年1月戊辰戦争。

1868年（明治元年）朝岡操、杉村輪之助高齢のため儒者を免ぜられる。保岡元吉江戸で歿す（68歳）。

維新後、藩は廃止され、県が置かれる。

1869年（明治2年）版籍奉還。松平直克、前橋知藩事となる。

1871年（明治4年）7月14日廃藩置県。前橋藩、前橋県に。

同年10月25日群馬県に。

1872年（明治5年）6月15日前橋城を県庁に。

2 石井良平の子孫たち

さて、その後の石井家は怎么样了のたあろうか。

(1) 石井欽四郎

欽四郎は、良平の四男である。家譜では、「号欽齋 前橋藩松平氏ニ仕へ儒官タリ。絵ヲ能クシ中風ニテ右半身不随ニナリタル後モナホ左手ニテ絵ヲ畫ク。墓所前橋。」となっている。それを裏付けるように「新撰安巳文苑人名録 安政四年版（1857年）」には「儒画 溜池 石井欽齋」として掲載されている。また、「安政文雅人名録 安政七年版（1860年）」および「現在當時廣益諸家人名録 文久元年版（1861年）」、「文久文雅人名録 文久三年版（1863年）」には「儒医 欽齋 名孝愛字士敬 川越藩 溜池 石井欽四郎」が掲載されている。これらの資料では、いずれも石井欽四郎は、江戸の「溜池」と示されている。溜池には、川越藩の上屋敷があった。

1849年（嘉永2年）藩日記（江戸）によれば、「11月14日 石井良平の御用に付き、同人伴欽四郎」という記事がある。但し前章で述べたように、欽四郎は1847年から杉村輪之助に預けられている。同じく元伺は菅沼家に預けられている。

1850年（嘉永3年）欽四郎は「親良平、興国院様（松平齊典）儒学御教導功績」により、「格別の思し召し」で儒者に取り立てられる。この年は藩主齊典が歿した年である。「擇所府君墓誌」で

は、「後若干年以先考為先君旧学之臣，故録其子孝愛，繼其遺職」（先考は父親）と書かれている。

1851年（嘉永4年）保岡元吉遍塞の藩日記の記事の中に、石井欽四郎（孝愛）の名が見える。

1860年（安政7年）「父良平の著述」である「小学摘解」に関する藩日記記事がある。

1863年（文久3年）6月「松平氏家中分限帳」によれば、御儒者 15人（扶持）石井欽四郎の名が見える。同じく藩の儒者として、番抜には、保岡元吉（20人）、朝岡操（25人）、杉村輪之助（20石）が掲載されている。

1862年（文久2年）5月11日 藩日記（前橋）に前橋への引っ越しの記事があり、その中に、石井欽四郎が出ている。9月15日の記事では、石井欽四郎は「向小路北側十一番」が割り当てられている。

1864年（文久4年・元治元年）2月19日の藩日記（前橋）によれば、「左之通，日割を以出立被 仰付候旨，為心得申来ル」さらに「3月25日江戸出立同28日前橋着 石井欽四郎」ということで引っ越ししたようだ。「右者爰元江為引越，家内引円今日着致候旨，尤夜ニ入候ニ付，明日廻勤致候段両様届出候旨」

しかし、9月3日の藩日記では、「石井欽四郎 右者痛風有之，倅太郎義懐（回）虫有之ニ付，上州伊香保江入湯致度，依之湯治御暇被下置度相願候，願之通被 仰付候，此段可申聞旨」と子息太郎とともに体調不良により、伊香保での湯治の許可を求めている。家譜にある「中風」のため、右半身不随などの後遺症があったと推測される。

1865年（元治2年・慶應元年）4月4日の藩日記（前橋）によれば、「石井欽四郎 右者親良平義，著述致候小学稿（摘）解，以思召板本ニ被仰付，右校合保岡元太（吉）江被仰付候旨，心得として申聞之，且右書籍原本有之候ハハ差出候様申聞之，欽四郎病氣ニ付，名代門屋東助江申聞之」となっている。同様のことは、4月14日の記事にもある。

1866年（慶應2年）3月4日の藩日記（前橋）によれば、「保岡正太郎（元吉の子息） 石井欽四郎 荒川玄燐 井村宗暢 右之面々，一昨年中江戸表ヨリ引越候処」（前二者は儒者，後二者は医師）。

6月22日の藩日記では「石井欽四郎 右者，痛風症 倅太郎疣虫」と体調不良となり，再び7月2日に伊香保へ湯治に赴いた。

8月16日の藩日記では「石井欽四郎 右者病中逆上致候ニ付，月代剃」と書かれており，ついに8月23日の藩日記では「石井欽四郎儀，近頃病身ニ相成，痲症ニ立居も六ヶ敷，廢人同様ニ相成」と決定的に悪化している。

とうとう，11月4日の藩日記では、「石井欽四郎 右者痲症ニ付，御奉公難相勤ニ付，弟石井元侗養子ニ致ス」こととなった。

1866年（慶應2年）欽四郎病気のため隠居。弟元侗（保五郎）が養子として家督を相続する。欽四郎の子息太郎は，元侗の養子となる。

（2）石井元侗

藩日記（江戸）では1842年（天保13年）12月15日兄石井脩太郎から「弟石井保五郎（五男）は、生質虚弱のため、医業」に就かせたいと申し出があり、「剃髪して、元侗と改号し、医業」に就くことになった。なお、同じく脩太郎からの届によれば、六男玄六郎は、真吉と改名し、他家への養子となった。

1866年（慶應2年）石井禮三郎孝則、平塚にて死去し、一人残された禮三郎の四男石井敏四郎は前橋に移る（14歳）。

この年、前橋に移動した石井欽四郎病気のため、隠居。石井元侗家督を継ぐ。上記のように元侗は弟保五郎である。それまで医者をしていた。欽四郎の子太郎を養子とする。また、ほぼ同じ頃に、石井敏四郎も石井元侗と暮らすことになった。可能性としては、隠居した欽四郎、当主の元侗、太郎（8歳）、敏四郎（14歳）と一緒に暮らしていたかもしれない。太郎と敏四郎は従兄弟である。元侗には、養子の太郎の他に、長女とも、三女さゑ、さらには次男清一郎があった。

明治以降の戸籍は、本籍群馬県南勢多郡荻窪村29番地（桂萱村を経て現前橋市荻窪町、旧前橋藩領）。その後、石井太郎が家督を継いだことから、元侗は1874年（明治7年）に歿したと思われる。墓所前橋。

（3）石井太郎

1858年（安政5年）12月1日生れ。欽四郎の子。元侗長男（養子）。1875年（明治8年）4月15日家督相続。日本郵船会社に勤め汽船事務長であった。

1909年（明治42年）10月4日ラク（1870年（明治3年）1月3日生れ）と協議離婚。1919年（大正8年）8月25日石井太郎は歿す。60歳であった。墓所は正光院である。従って、敏四郎と太郎は継続して関わっていたことが示されている。敏四郎の四男石井正は、小学生のときに二年間、横浜に住んでいた太郎家の養子となる。

石井とも

1861年（文久元年）2月2日生れ。元侗長女。太郎死亡により1919年（大正8年）8月家督相続。「産婆を業とし、前橋に居住」。死去は不明だが、1925年以降と推測される（戸籍は80年で廃棄）。

石井さゑ

1869年（明治2年）1月6日生れ。元侗三女。1887年（明治20年）11月20日南勢多郡下大嶋村（木瀬村を経て現前橋市）関口萬作長男藤太郎と結婚。

(4) 石井敏四郎敏行 号訥堂

群馬県南勢多郡荻窪村から、1898年(明治31年)3月15日分家。東京市麻布区三軒家町33番地 戸主石井敏四郎となる。それまでは、石井元侗、次いで太郎が戸主であった。麻布区三軒家町は、正光院のある桜田町の隣町である。

父 石井禮三郎孝則 家譜には「仕官せず」と書かれている。しかし、前述したように、兄譲二郎(御書物同心)の養子となった経緯があり、どのようなことから、仕官しなかったのか、わからない。分家して、平塚で漢学塾を開き、傍ら医業を営む。1866年(慶應2年)に歿し、平塚阿弥陀寺に葬る。

敏四郎の兄弟

石井和一郎 早逝。平塚阿弥陀寺に葬る。

石井修二郎 同上、石井練三郎 同上、石井謙五郎 同上、石井鉦六郎 同上。(男の兄弟は皆早逝しているのである。)

女子 伊豆に嫁す。

敏四郎は、1852年(嘉永5年)4月11日石井禮三郎孝則の四男として平塚に生まれ、1866年(慶應2年、14歳)父禮三郎の死後前橋に移り、1871年(明治4年、19歳)陸軍兵役に服し、爾来陸軍に奉職。従って、前橋に在住していたのは、1866年14歳から、1871年19歳までの、明治維新時の5年間であった。前述したように石井欽四郎、石井元侗、石井太郎と共に暮らしていたと推測される。ただし、石井欽四郎が隠居し、石井元侗が家督を継いだのがちょうど1866年であり、欽四郎がいつ亡くなったのかは、わかっていない。

1876年(明治9年)幕府・藩の家禄制の廃止が決定され、金禄公債が発行された。石井家では、1874年(明治7年)に石井元侗が歿し、石井太郎が家督を相続していた。その時の記録があり、1874年(明治7年)12月28日付けで「家禄19石 第一大区小一区(前橋町内の区分) 石井太郎」となっている。

1876年の家禄制の廃止によって、太郎と敏四郎は何らかの職業に就かざるを得なくなっていた。石井敏四郎は、19歳で兵役に服し、そのまま陸軍の軍人として生きることを選んだのであろう。石井太郎は、時期は不明だが、日本郵船会社に就職した。

敏四郎は1877年(明治10年、25歳)西南戦役に従軍、市川教導團、東京陸軍省、佐倉連隊区司令部副官(1901年(明治34年))等を歴任、陸軍歩兵少佐正六位勲四等。前述したように、1898年(明治31年)3月15日東京市麻布区麻布三軒家町33番地へ分家する。その前は、千葉県市川(市川教導團勤務)に住んでいた。三軒家町に移ってからも、千葉県佐倉(佐倉連隊勤務)、麻布区広尾町などに居住し、その後三軒家町に戻っている。

1922年(大正11年)1月23日代々木富ヶ谷にて死去、享年71歳、正光院に葬る、雪岳院泰雲敏行居士。

妻 とう

岩崎とう 麻布古川橋畔材木商岩崎七兵衛七女 1864年（元治元年）10月1日生 1884年（明治17年、20歳）6月5日敏四郎と結婚する。1898年（明治31年）敏四郎とともに分家する。1942年（昭和17年）4月7日代々木富ヶ谷にて死去、享年79歳、正光院に葬る。

参考文献：

- 青木美智男編（2007）『日本近世社会の形成と変容の諸相』（ゆまに書房）
青木美智男（2009）『藤沢周平が描ききれなかった歴史『義民が駆ける』を読む』（柏書房）
阿久津聡（1994）「前橋藩藩校博諭堂教授保岡嶺南の日記」『群馬文化』239号
石井 耕（2009）「御家人と昌平坂学問所・学問吟味」『北海学園大学学園論集』第140号
石井 耕（2013）「日本の人事政策の起源—江戸幕府後期御家人の人材登用と昇進」『北海学園大学学園論集』第156号
石川 謙（1960）『日本学校史の研究』（日本図書センター、1977年復刊）
石川忠久（1998）「序」『昌平坂学問所日記Ⅰ』（財団法人斯文会）
磯ヶ谷紫江（1926）「石井擇所之墓」『墓碑史跡研究』33号
磯田道史（2002）「幕末維新期の藩校教育と人材登用—鳥取藩を事例として—」『史学（慶應義塾大学）』第71巻第2・3号
磯田道史（2003）『近世大名家臣団の社会構造』（東大出版会）
揖斐 高（2009）『江戸の文人サロン』（吉川弘文館）
今関天彰（2015）「尾藤二洲」『江戸詩人評伝集1』（揖斐高編、平凡社）
氏家幹人（2013）「書物方年代記④ 寛政七年—文化十年」『北の丸』45号
氏家幹人（2014）「書物方年代記⑤ 文化十一年—安政四年」『北の丸』46号
宇野田尚哉（2007）「儒者」『身分的周縁と近世社会5 知識と学問をになう人びと』吉川弘文館
小川恭一（2003）『江戸の旗本事典』（講談社文庫）
小川恭一（2006）『徳川幕府の昇進制度—寛政十年末旗本昇進表—』（岩田書院）
笠谷和比古（1993）『士思想 日本型組織・強さの構造』（日本経済新聞社）
笠谷和比古（2005）『武士道と日本型能力主義』（新潮社）
笠谷和比古（2007）「年功序列制か、能力主義か—この言説の陥穽」『季刊政策・経営研究』
上白石実（2011）『幕末期対外関係の研究』（吉川弘文館）
川越市立博物館（1998）『黒船来航と川越藩』（川越市立博物館）
北島正元（1974）「三方領知替」と上知令」『徳川林政史研究所研究紀要』
旧事諮問会編（1890）『旧事諮問録（上）（下）』（1890年は第一回の会の開催年、進士慶幹校注、1986年第1刷、岩波文庫）
小林ふみ子（2014）『大田南畝』（岩波書店）
坂口筑母（1983）「天保下級武士 幕府昌平校 詩人と生活思想—「慷慨」「学問」「自由」への帰結—」『季刊日本思想史』第21号
重田正夫（2015）『川越藩 シリーズ藩物語』（現代書館）
須田 努（2022）『幕末社会』（岩波新書）
高橋章則（1989）「近世後期の歴史学と林述斎」『日本思想史研究』21号
高柳金芳（1982）『江戸時代御家人の生活』（雄山閣出版）
辻本雅史（1988）「十八世紀後半期儒学の再検討 折衷学・正学派朱子学をめぐる」『思想』766号

- 辻本雅史 (1990) 『近世教育思想史の研究 日本における「公教育」思想の源流』(思文閣出版)
- 辻本雅史 (2002) 「幕府の教育政策と民衆」辻本雅史・沖田行司編『教育社会史 新体系日本史16』(山川出版社)
- 戸森麻衣子 (2021) 『江戸幕府の御家人』(東京堂出版)
- 長澤孝三 (2012) 『幕府のふみくら』(吉川弘文館)
- 橋本昭彦 (1993) 『江戸幕府試験制度史の研究』(風間書房)
- 橋本昭彦 (1994) 「幕府直轄学校と藩邸内学校」『東京都教育史 通史編一』
- 橋本昭彦 (2003) 「第三章 官学への転換期における林家塾昌平校の実態」生馬寛信編『幕末維新时期漢学塾の研究』(溪水社)
- 橋本昭彦 (2004) 「近世武士階級のライフコースにおける学習の重み—研究ノート—」高木靖文編『近世日本における生涯教育システムの成立と発展に関する全体論的研究Ⅰ』(幕末維新时期学校研究会)
- 橋本昭彦 (2005) 「江戸時代の武士にとっての学習経歴の重みについて—幕臣の次男三男等の事例から—」高木靖文編『近世日本における生涯教育システムの成立と発展に関する全体論的研究』(幕末維新时期学校研究会)
- 福井 保 (1980A) 『内閣文庫書誌の研究 日本書誌学大系12』(青裳堂書店)
- 福井 保 (1980B) 『紅葉山文庫』(郷学舎)
- 福井 保 (1983) 『江戸幕府編纂物解説編』(雄松堂出版)
- 福井 保 (1985) 『江戸幕府刊行物』(雄松堂出版)
- 富士川英郎 (1975) 「長野豊山『松陰快談』」『新潮』72巻6号
- 藤田 覚 (1987) 『幕藩制国家の政治史的研究』(校倉書房)
- 藤田 覚 (1989) 『天保の改革』(吉川弘文館)
- 藤田 覚 (1992) 『遠山金四郎の時代』(校倉書房)
- 藤田 覚 (1994) 『水野忠邦』(東洋経済新報社)
- 藤田 覚編 (2003) 『近代の胎動 日本の時代史17』(吉川弘文館)
- 藤田 覚 (2005) 『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会)
- 藤田 覚 (2009) 『遠山景元』(山川出版社)
- 藤田 覚 (2015) 『幕末から維新へ シリーズ日本近世史⑤』(岩波新書)
- 布施賢治 (2006) 『下級武士と幕末明治』(岩田書院)
- 前橋市立図書館 (2007) 『前橋藩松平家記録 解説 第四十巻』(煥乎堂)
- 眞壁 仁 (2007) 『徳川後期の学問と政治』(名古屋大学出版会)
- 水谷三公 (2000) 『江戸の役人事情』(ちくま新書)
- 森潤三郎 (1933) 『紅葉山文庫と書物奉行』(臨川書店, 1978年複製版)
- 森 銚三 (1970) 「半可山人植木玉厓」『森銚三著作集 第一巻』(中央公論社, 以下, 原文の著作年ではなく, 著作集の発行年で示す)
- 森 銚三 (1971) 「勝田半齋の詩中八友歌」『森銚三著作集 第八巻』
- 森 銚三 (1989) 「岡本況齋の交友簿」『森銚三著作集 第十二巻』
- 森 銚三 (1989) 「長野豊山」『森銚三著作集 第十二巻』
- 森田 武 (1982) 「文政・天保期における川越藩の公儀拝借金と知行替要求について」『埼玉大学紀要 教育学部 (人文・社会科学)』第31巻
- 山本武夫 (1979) 「「御実紀調所」再考」『国学院雑誌』80巻11号
- 山本英貴 (2015) 『旗本・御家人の就職事情』(吉川弘文館)
- 山本博文 (2005) 「幕府の昇進試験「学問吟味」の始まり」遠山美都男・関 幸彦・山本博文『人事の日本史』(毎日新聞社, その後新潮文庫)
- 山本博文 (2007) 『旗本たちの昇進競争』(角川ソフィア文庫)
- 山本博文 (2015) 『武士の人事評価』(中経出版 新人物文庫)

以下の文献は、著者名と書名の順序が混在している。

- 市古貞次他編（1993）『国書人名辞典』（岩波書店）
大石 学編（2006）『近世藩制藩校大事典』（吉川弘文館）
大石 学編（2009）『江戸幕府大事典』（吉川弘文館）
大久保利謙編集 江戸旧事采訪会編（1980）『江戸 第二巻 幕政編（二） 昌平学科名録』（立体社）
大田直次郎「科場窓稿」『蜀山人全集 第二巻』（日本図書センター，1979年10月）
小川恭一編（1989）『江戸幕府旗本人名事典』（原書房）
小川恭一編（1998）『寛政譜以降旗本家百科事典』（東洋書林）
『川越市史』（1973）（第3巻 近世篇）
『寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会）
熊井 保・大賀妙子編（1989）『江戸幕臣人名事典』（新人物往来社）
『群馬県史 資料編14 近世6』（1986年）
『群馬県史 通史編6 近世3』（1992年）
『埼玉県史調査報告書 分限帳集成』（1987年）
『埼玉県教育史 第二巻』（1969年）
『升堂記 東京大学史料編纂所所蔵 翻刻ならびに索引』（関山邦宏発行，1997年3月）
『升堂記 東京都立中央図書館河田文庫本 翻刻ならびに索引』（関山邦宏発行，1998年3月）
『新編埼玉県史 通史編4 近世2』（埼玉県，1989年）
『新編埼玉県史 資料編12 近世3 文化』（埼玉県，1982年）
『徳徳川実紀』黒板勝美 国史大系編修会『国史大系』（吉川弘文館）
竹内 誠・深井雅海編（2005）『日本近世人名辞典』（吉川弘文館）
『東京市史稿 市街篇』（臨川書店，復刻版）
『日本教育史資料第七巻』（文部省編，1980年臨川書店複製版第2刷）
『日本史必携』（吉川弘文館，2006年）
橋本昭彦 財団法人斯文会編（1998，2002，2006）『昌平坂学問所日記Ⅰ－Ⅲ』（財団法人斯文会）
羽太正養（1807，文化4年）「休明光記」『北方未公開古文書集成 第四巻』（叢文社，1978年6月発行）
平田篤胤（1811，文化8年）「千島の白浪」『北方史史料集成 第五巻』（北海道出版企画センター，1994年11月発行）
『藤岡屋日記』（三一書房）
『前橋市史』（1973）（第二巻 近世上）
『前橋市史』（1985）（第六巻）
松崎慊堂『慊堂日曆1巻』（山田琢訳注，東洋文庫，平凡社，1970年8月）
宮崎成身『視聽草』福井保解題『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第二』（汲古書院，1986年4月）
『柳堂補任』東京大学史料編纂所『大日本近世史料』（東京大学出版会）

